

ドイツの少年サッカーフェスティバル
—ニーダーラインサッカー連盟における「特別行事」の展開—

藤井雅人¹⁾ 乾真寛¹⁾
山本順之¹⁾ 武藤克宏¹⁾

Zum Kinderfußballfest in Deutschland
Am Beispiel der
„Sonderveranstaltungen“ beim Fußballverband Niederrhein

Masato Fujii¹⁾ Masahiro Inui¹⁾
Junji Yamamoto¹⁾ Katsuhiko Muto¹⁾

Zusammenfassung

In diesem Beitrag sollen die Inhalte und besonderen Merkmale der „Sonderveranstaltungen“, an denen Landesfußballverbände, Schulen und Sportvereine gemeinsam teilnehmen, aufgezeigt werden.

- 1) Der Deutsche Fußball-Bund (DFB) rief als einen seiner Ausschüsse den Schulfußballausschuß ins Leben, um den Schulfußball und die Zusammenarbeit von Schul- und Vereinsfußball zu fördern. Da diese beiden Aufgaben der Kulturhoheit der Länder in Deutschland unterliegen, werden sie von den Schulfußballausschüssen der dem DFB untergeordneten Landesfußballverbände übernommen. Daher ist die Durchführung der „Sonderveranstaltungen“ eine der Aktivitäten der Schulfußballausschüsse in den Landesfußballverbänden.
- 2) Der Schulfußballausschuß beim Fußballverband Niederrhein (FVN-Schulfußballausschuß) in Nordrhein-Westfalen veranstaltet zwei Arten von „Sonderveranstaltungen“. Zum einen die „Sepp-Herberger-Tage“, bei denen mehrere Schulen und Sportvereine gemeinsam teilnehmen. Zum anderen die „Faszination Fußball“, an der nur eine Schule und ein Sportverein teilnehmen.
- 3) Beide vom FVN-Schulfußballausschuß durchgeführten „Sonderveranstaltungen“ sind vornehmlich für Grundschüler gedacht. Daher nehmen neben den Sportvereinen vornehmlich Grundschulen teil. Bei beiden „Sonderveranstaltungen“ geht es nicht so sehr darum, sportliche Höchstleistungen zu zeigen. Deshalb ist das Programm so gestaltet, daß anhand spielerischer und altersgemäßer Spiel- bzw. Übungsangebote jedem Schüler und jeder Schülerin die Attraktivität der Sportart Fußball vermittelt

1) 福岡大学スポーツ科学部

1) Fukuoka University, Faculty of Sports and Health Science

werden kann.

- 4) Bei den „Sonderveranstaltungen“ geht es vor allem darum, die Grundlage für eine dauerhafte, partnerschaftliche Zusammenarbeit zwischen den beteiligten Grundschulen und Sportvereinen zu schaffen, denn die „Sonderveranstaltungen“ selbst sind nur ein Anlaß. Da eine dauerhafte, partnerschaftliche Zusammenarbeit der beteiligten Grundschulen und Sportvereine das freiwillige Bemühen beider Seiten voraussetzt, ergreift der FVN-Schulfußballausschuß nach dem Abhalten der „Sonderveranstaltungen“ keine weiteren Maßnahmen.

(特) 緒 言

平成15年度より福岡大学では、エクステンションセンター主催の市民カレッジ講座として、「キッズ・サッカークラブ」と「キッズ・サッカー教室」を開講している。この2つの講座には、小学校1～4年生男女の「キッズ」が参加しており、福岡大学サッカー部コーチングスタッフおよび学生部員が、「キッズ」にサッカーをプレーする楽しさを体感させるとともに、基本技術を習得させ、スキルを向上させることを目指して（「キッズ・サッカークラブ」および「キッズ・サッカー教室」の案内資料より）指導を行っている。「キッズ・サッカークラブ」はほぼ1ヶ月に1回の割合で計13回、また「キッズ・サッカー教室」は各期2回あるいは3回の集中方式で全3期開講され、両者合わせると受講者数は100名近くになることもある^{註1)}。これらの講座は、スポーツを通しての大学の地域社会への貢献という観点だけでなく、子どもたちへのサッカーの普及や大学教育カリキュラム内でのサッカー指導者の養成といった、今後の我が国のサッカーの発展にとって不可欠な施策の具体的な展開としても注目されよう^{註2)}。

この2つの講座では、地域スポーツクラブでの活動に代表されるような継続的で体系的な指導というよりはむしろ、遊びの要素を多く取り入れた単発的で体験指向的な指導が中心となる。しかし、そこでは、限られた開講回数・時間内でスキルの向上も保証されなければならないため、体験指向的でありながらも体系的にスキルを高めていけるような適切な指導プログラムの設定が極めて重要である。現在までのところ、開講当初から受講者数は増加し続けており、また受講者のスキルも目に見えて向上してきているなど、順調に成果をあげていると見ることができる。しかしなお、今後引き続きその内容的な充実を図っていく努力は必要であろう。

ところで、1990年代に入り、シュポルトフェライン（Sportverein：以下フェラインと略す）と呼ばれる地域スポーツクラブでの継続的かつ体系的なサッカー指導で知られるドイツでも、単発的なサッカーイベントの開催が頻繁に見られるようになってきている。いわゆる「特別行事（Sonderveranstaltung）」^{註3)}と呼ばれる、この青少年のためのサッカーイベントは、サッカー連盟の主催の下で地域の学校とフェラインが共同参加する「フェスティバル」の形式を取って開催される。福岡大学の講座のように大学主催ではないものの、サッカー大国ドイツにおいてサッカー連盟、学校、フェラインの三者が共同で、単発的・体験指向的なサッカーイベントを盛んに実施しているという事実は、緒についたばかりの「キッズ・サッカークラブ」と「キッズ・サッカー教室」の発展に責任を有する我々にとっても、極めて興味深い。実は、この「特別行事」の頻繁な開催の背景には、1980年代以降の「青少年プレーヤーの減少」や「ドロップアウト現象」といったドイツ青少年のサッカー離れをめぐる問題の顕在化（藤井¹⁸⁾）がある。つまり、「キッズ・サッカークラブ」「キッズ・サッカー教室」と「特別行事」の両者はともに、日本とドイツそれぞれのサッカーの変革のうねりの中で青少年へのサッカーの普及を目指して生じてきたということができるし、また単発的・体験指向的という実施形式でも類似する点が多い。従って、「キッズ・サッカークラブ」「キッズ・サッカー教室」に関わる我々が、ドイツの「特別行事」の展開に関心を向けること、具体的には「特別行事」

がどのような内容から構成されており、そこにはどのような特色が見られるのかを明らかにしようとすることは、極めて有意義な試みであるように思われる。

これまで我が国では、ドイツのフェラインでのサッカー活動が、青少年育成の1つのモデルとして注目・研究されることはあっても、サッカー連盟、学校、フェラインの連携やその一環として展開される「特別行事」については殆ど明らかにされてこなかった。また、ドイツ本国でも、この「特別行事」に関する情報・研究は極めて少ないのが現状である。

以上のような問題意識と先行研究の状況に基づいて、本論稿では、サッカー連盟、学校、フェラインの三者による「特別行事」の具体的な内容と特色を明らかにすることを目的とする。なお、こうした本論稿の目的は、主に1994年5月24日および同年9月21日に実施した筆者による「特別行事」の観察調査、同時期に数回にわたり筆者が行った「特別行事」の関係者へのインタビュー調査等で得られた質的データの分析を通して達成される。

(監) ドイツにおける青少年のサッカー活動

本項では先ず、ドイツにおける主要な青少年サッカー活動の場である「フェラインサッカー」「学校サッカー」について概説する。それは、後述するように、本論稿で焦点を合わせる「特別行事」が、学校サッカーの枠組みの中でフェラインサッカーと密接な関連をもって実施されており、この「特別行事」の内容や特色を分析するには先ず、その基盤となっている学校サッカーとフェラインサッカーをそれぞれ概観する必要があるという理由による^{註4)}。

1. 学校サッカー

全16州から成る連邦国家であるドイツでは、特に教育、科学、文化に関する各州の権限が大きく(州の「文化高権」という)、学校教育は各州に設置された文部省の管轄事項となっている。各州の文部大臣が集まって協議する諸州文部大臣常設会議(以下文部大臣会議と略す)が、ドイツ全州に共通する教育政策指針を決定してはいるものの、各州は、その文部大臣会議の指針を踏まえつつ、独自の学習指導要領に基づく学校教育を展開している(天野ら¹⁾, pp. 39-40)。

学校教育の枠組みの中で実施されるスポーツ教育、いわゆる「学校スポーツ (Schulsport)」^{註5)}もまた、各州毎に異なる学習指導要領に基づいて実施されている。文部大臣会議によって公布された「第2次学校スポーツ行動計画」^{註6)}にもあるように、学校スポーツの主要な目標は、生徒をスポーツの楽しさや喜びに目覚めさせ、それを余暇に営むように動機づけを与え、最終的に生涯にわたるスポーツ活動を実践させるという点に置かれている。こうした学校スポーツの目標は、学校教育終了後を含めた余暇のスポーツ活動の主要な場であるフェラインとの連結を明確に意識するものである^{註7)}。

学校スポーツは、週3時間の実施を原則とする学校必修科目としての正課スポーツ授業 (Sportunterricht) と、課外スポーツクラブ、学校対抗競技会、スポーツフェスティバルなどの課外スポー

ツ活動 (Außerunterrichtlicher Schulsport)^{註8)}とに大別される。この2つの領域の有機的関連に基づく学校スポーツの展開によって、上記の目標の達成が目指されることになる。また、学校スポーツは、先にも述べたように、フェラインとの緊密な関連をその理念に含めて展開されなければならないため、学習内容、指導者、実施時間などに関する学校教育法規上の制約が緩和される課外スポーツ活動には特に、フェラインスポーツとの連携の場としての機能も求められる (Haag et al.²¹⁾, pp. 266-267; Küpper²⁷⁾註9)。

こうした学校スポーツの中のサッカー教育は「学校サッカー (Schulfußball)」と呼ばれ、正課スポーツ授業におけるサッカー、すなわち「正課サッカー授業」と、課外スポーツ活動におけるサッカー、すなわち「課外サッカー活動」とに分けられる。例えば、ノルトライン・ヴェストファーレン州 (Nordrhein-Westfalen 州: 以下 NRW 州と略す) の学校サッカーは次のように行われている。まず、正課サッカー授業では、原則的に NRW 州文部省公布の学習指導要領に示されるサッカーの学習内容が、学校教師の指導の下に実践される。1980年に公布された NRW 州学習指導要領を例に取れば、サッカーは、選択必修スポーツ種目 (ボールゲーム) 中のシュートゲームとして位置づけられており、同じくシュートゲームに区分されるホッケーとの選択において学ばれる (Der Kultusminister des Landes Nordrhein-Westfalen⁹⁾, pp. 16-23)註10)。サッカーの学習単元は、第3・4学年で学ばれる単元(企)、第5～10学年で学ばれる単元(協)・(労)・、第11～13学年で学ばれる単元・の全6単元から成る註11)。それぞれの単元には異なる学習目標が設定され、具体的な練習内容・方法が示されている (Der Kultusminister des Landes Nordrhein-Westfalen⁹⁾, pp. 188-214)註12)。なお、1999年8月からの移行期を経て2003年8月より正式に施行されている現行の NRW 州学習指導要領では、その教科内容の領域編成が、それまでのスポーツ種目単位から「スポーツの意味」をテーマに掲げるものに変化しており註13)、それに応じて学校スポーツの中のサッカーの位置づけも従来とは大きく変わってきている。具体的には、サッカーは、「ルールの中並びにルールを用いてプレーするーボールゲーム」という内容領域の中で、バスケットボール、ハンドボール、ホッケー、バレーボールとともにチームスポーツとして選択的に学習されている (岡出³³⁾, pp. 87-99)註14)。

また、学校では、正課サッカー授業とともに、課外サッカークラブでの活動、各学校代表のサッカーチームによる NRW 州の学校対抗競技大会への参加、本論稿の主題でもある「特別行事」の開催など、様々な形態での課外サッカー活動も行われている。これらの課外サッカー活動は、正課サッカー授業に関する補足的提供、診断・試験的提供などといった多様な視点からの意味づけが可能であり註15)、正課サッカー授業と相互補完的な関係にある。また、この課外サッカー活動は、フェラインサッカーとの連携を展開する場として極めて重要な機能を果たしている。それは、課外サッカー活動の領域において、例えば後述のように「特別行事」がフェラインの協力の下に開催されていることや、多くの課外サッカークラブが、NRW 州の文部省とスポーツ連盟によって作成されたタレント発掘・育成プログラムに従って、フェラインと連携しつつ活動している註16)ということからも分かる。

このように、学校サッカーでは、正課サッカー授業と課外サッカー活動の両者が密接に関連し合

いながら、さらにはまたフェラインサッカーとも連携しながら、生涯にわたりサッカーをプレーし、楽しむための行為能力の育成が目指されている。

2. フェラインサッカー

2000年の統計によれば、ドイツには約87,000のフェラインが存在し、その会員総数は全人口の3分の1弱（28.5%）にあたる約2,300万人にのぼる（Deutscher Sportbund⁹⁾, p. 76）。フェラインでのスポーツ活動、すなわちフェラインスポーツ（Vereinsport）は、ジョギングや軽い体操といった、組織に依存せずに自主的に行うことができる、いわゆる自己組織的なスポーツ活動に次いで多くのドイツ国民によって定期的に行われているスポーツ活動である^{注17)}。こうした状況は、フェラインがドイツ国民のスポーツ活動にとって非常に重要な場となっていることを示している。特に青少年のスポーツ活動においては、このフェラインスポーツの位置づけは一層高くなっている。これまでの調査結果によれば、ドイツの青少年の半数近くがフェラインに自発的に加入しており、その多くはフェラインで定期的に活動するスポーツマン・スポーツウーマンである^{注18)}。このフェラインスポーツは、余暇活動全体で見ても、例えば音楽鑑賞や友人との集いなどとともに、青少年に最も人気の高い活動の1つとなっている^{注19)}。フェラインにおける実際の活動は、主にスポーツ種目に関わるトレーニングと競技会への参加であり、その内容はフェラインの自治的な決定に基づき実施される^{注20)}。

自治的な社会組織であるフェラインは、市町村・郡・州レベルの種目包括的な連盟および種目別の競技連盟（ただし競技連盟については最上位の連邦レベルの連盟も存在する）という2つのルートを紹介して、連邦レベルのフェラインスポーツ統括組織であるドイツスポーツ連盟に結集する（高津²⁶⁾, pp. 242-243）。ドイツスポーツ連盟は、大綱的スポーツプログラムの展開やボランティアキャンペーンの推進など、ドイツスポーツの振興のための種目包括的な舵取りを行う（Deutscher Sportbund⁹⁾, p. 10）。ただし、その下位組織として位置づけられる全55に及ぶ連邦レベルの競技連盟は、ドイツスポーツ連盟に対して自治的に当該種目に関する振興施策を実施することができる（Deutscher Sportbund⁹⁾, p. 7）。つまり、後述するようにフェラインでのサッカー活動、すなわち「フェラインサッカー（Vereinsfußball）」の展開は、ドイツスポーツ連盟よりもむしろ、サッカーに関わる連邦レベルの競技連盟であるドイツサッカー連盟（Deutscher Fußball-Bund：以下DFBと略す）の施策からより大きな影響を受けることになる。

2003年10月31日付のDFB公告（Offizielle Mitteilungen）によれば、サッカーを活動スポーツ種目とするDFB登録フェラインは、2002年現在26,306存在し、その登録会員は626万人に達する。2002年のドイツの全人口が8,523万人である（Statistisches Bundesamt⁴¹⁾, p. 45）から、DFB登録会員は全人口の実に約8%に相当する。まさにドイツの国民的スポーツといえるサッカーは、特に男子を中心とする青少年にとっても最も人気の高いフェラインスポーツ種目である。2003年には、18歳以下の182万人の青少年がDFBに登録している。連邦統計局によれば、2001年における6歳以上18歳以下のドイツの青少年人口が1,119万人であり（Statistisches Bundesamt⁴¹⁾, p. 60）、2003年の数値とは

若干異なると考えられるが、この2001年の数値を考慮すれば、青少年年代のDFB登録会員は、その全体数のほぼ15%にも及ぶものと推測される。

青少年のフェラインサッカーは、DFBによって定められた、GユースからAユースまでの年齢段階区分に沿った形で展開される^{注21)}。各フェラインでは、ユース段階毎にチームが編成され、それぞれのチームの発達段階に応じた週間回数のトレーニングが指導者によって実施される。そして週末には、各チームは、サッカー連盟が運営するリーグ戦形式の競技大会に参加する。このリーグ戦形式の競技大会では、各ユース段階毎に競技レベル別のリーグが設置されており、各チームはそのレベルに応じたリーグの中で戦うことになる^{注22)}。また各フェラインからは、同ユース段階であっても複数のチームのリーグ登録が認められており、できるだけ多くの青少年プレーヤーに実戦の経験を積ませることができるとなっている^{注23)}。

(企) サッカー諸連盟内部に設置される学校サッカー専門委員会

本論稿で焦点が当てられる「特別行事」は、学校での課外サッカー活動の一形態である。ただし、学校とともに地域のフェラインもそれに参加していることから、この「特別行事」は、学校サッカーとフェラインサッカーによる「交流・連携の場」と捉えることができる。このように2つの異なる領域におけるサッカーの交流・連携が可能となっている背景には、フェラインサッカーの統括組織であるサッカー諸連盟が、その中の学校サッカー専門委員会を中心に、「特別行事」の企画・運営者としての役割を果たしていることがある。サッカー諸連盟内に設置されている学校サッカー専門委員会の課題は、後述のように「学校サッカーの振興」と「学校サッカーとの連携の推進」であり、「特別行事」以外にも学校サッカーに関わる様々な活動を展開している。

本項では、「特別行事」の具体的内容を詳述する前に、その企画・運営の中心的役割を果たしているサッカー諸連盟の学校サッカー専門委員会の実態を明らかにする。そのための手順として、フェラインサッカーを統括するサッカー諸連盟の構造と活動内容に、次いでそれらサッカー諸連盟に設置されたフェラインサッカー側の組織として、学校サッカーとの連携を模索している学校サッカー専門委員会の構造と活動内容に言及したい。

1. ドイツサッカー連盟を頂点とするフェラインサッカーのピラミッド構造

サッカープレーヤーと彼らが所属するフェラインは、市町村レベルの郡サッカー連盟と広域サッカー連盟から成る州サッカー連盟、そしてその州サッカー連盟が構成単位となっている地域サッカー連盟を経由して、連邦レベルの競技連盟であるDFBに統括されている(図1参照)。DFBは、こうしたフェラインサッカーの構造を「ピラミッド」(Deutscher Fußball-Bund[®], p.5)と表現している。ピラミッドの頂点に位置するDFBは、青少年段階を含めたナショナルチームの編成・強化、プロフェッショナルリーグとしてのブンデスリーガの運営といった連邦レベルの課題に取り組むとともに、その「規約および諸規則」に則って、DFB内部に設置された各種専門組織を中心に「サ

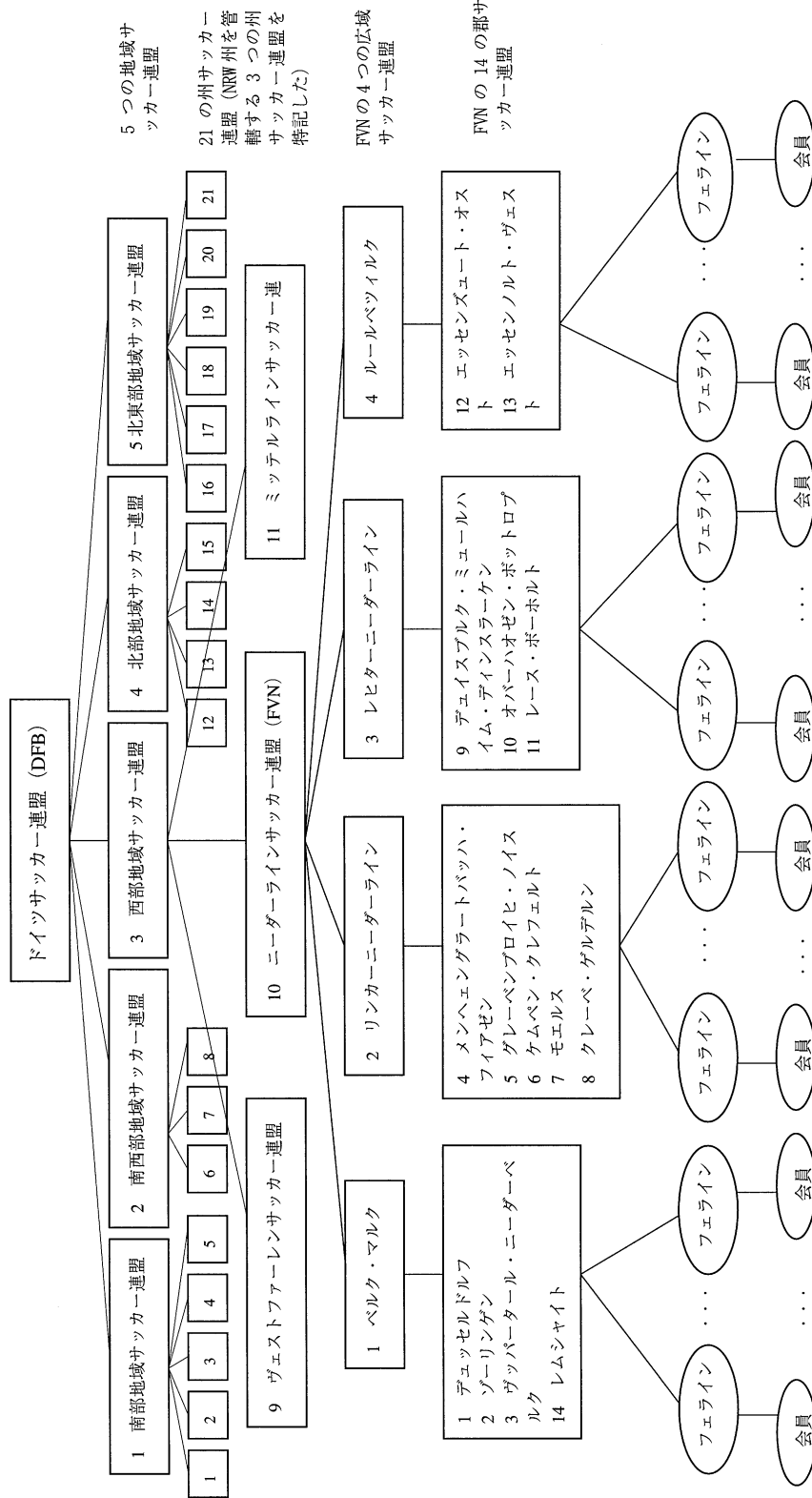


図1 DFBを頂点とするフェラインサッカーの組織構造
 (後に詳述するニーダーラインサッカー連盟を中心に記述した。実際には、他の20の州サッカー連盟も広域サッカー連盟、郡サッカー連盟、フェライン、会員から成る同様の組織構造をとっている)

サッカーの発展を促す」(DFBの「規約」より)ための様々な基本政策を決定・展開する。こうしたDFBの基本政策は、ピラミッド構造全体の方向性を指し示す枠組みとなっている。ただし、教育・科学・文化政策に関する各州の文化高権に基づき、スポーツも原則的に各州の管轄事項であるという伝統を反映して、連邦レベルの競技連盟としてのDFBが基本政策の具現化に直接的に大きな影響力を行使するというよりはむしろ、その下位組織である各州サッカー連盟が、DFBの政策指針を踏まえつつ、各管轄地域の特色を生かした独自の政策を展開することになる。つまり、全21に及ぶこの州サッカー連盟の政策が、DFBを頂点とするピラミッドの最も下層、すなわち基盤として位置づけられるフェラインとサッカープレイヤーの活動を大きく方向づけているということである。しかし、フェラインとサッカープレイヤーは、原則的に州サッカー連盟の政策という基本的枠組みの中で活動してはいるものの、実際にはそれらを必ずしも全てにおいて実行しているわけではない。こうした背景には、例えば国家を含めた第三者から独立しているというフェラインの自治組織的性格(Röthig et al.³⁶, p.467)や、フェライン間に見られる人的・物的・財政的資源の相違^{注24}が、フェラインにおける州サッカー連盟の政策の具現化をしばしば困難にしているという事情がある。

このように、DFBに統括されるフェラインサッカーのピラミッド構造は、現実には上意下達の単純構造を示しているわけではなく、DFBの指針を踏まえた各州サッカー連盟の独自の政策展開とその具現化に重要な役割を果たすフェラインの自治的活動との相互作用的な関係の中で成立しているということができる。そして後述するように、こうした構造の特色が、学校サッカー専門委員会を中心とする学校サッカーとの連携の展開・推進にも反映されることになる。

2. 情報交換と活動指針提示の場としてのDFB学校サッカー専門委員会

サッカーの発展に寄与することをその活動目的に掲げるDFBは、フェラインサッカーにとどまらず、学校および文部行政機関の管轄下にある学校サッカーの振興にも大きな関心を有している。こうした学校サッカーへの関心を代表するDFBの内部組織が、「DFB学校サッカー専門委員会(DFB-Schulfußballausschuß:以下DFB学校委員会と略す。なお、以下では、各レベルのサッカー連盟の学校サッカー専門委員会も同様に学校委員会と略す)」である。このDFB学校委員会は、青少年サッカーの振興を課題とする「DFB青少年サッカー専門委員会」内に、「DFB女子サッカー専門委員会」とともに付随的に設置されている。前述したDFBの構造と同様に、DFB学校委員会の下には下位組織として地域サッカー連盟および州サッカー連盟の学校委員会が設けられており、DFB学校委員会は、各地域サッカー連盟学校委員会の委員長1名ずつの全5名(うち1名はDFB学校委員会の委員長を務める)とDFB女子サッカー専門委員会の委員長1名の計6名を構成メンバーとする(DFBの「青少年規則」より)(図2参照)。ただし、DFB学校委員会では、こうした構成メンバーによる活動ばかりでなく、青少年サッカー専門委員会やDFB本部内の青少年部局、あるいはドイツサッカーナショナルチーム監督、さらにはDFB会長といった学校サッカーに関心を有する組織や人物との交流も活発に行っている^{注25}。

DFB学校委員会の活動課題は、DFBの学校サッカーへの関心を代表する組織として、学校スポ

ドイツの少年サッカーフェスティバル

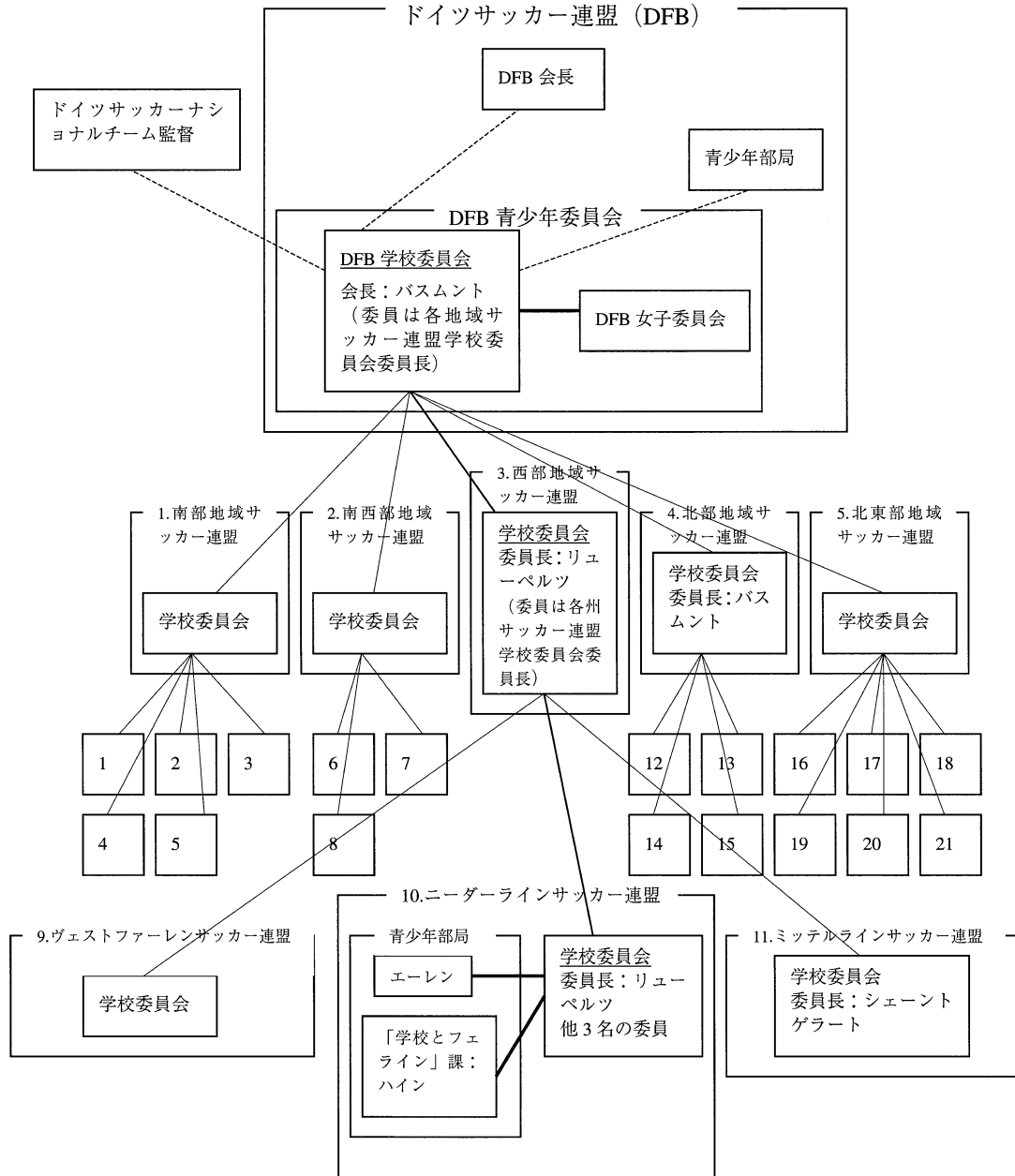


図2 DFB および下部組織サッカー諸連盟の学校委員会の組織構造

(後に詳述するニーダーラインサッカー連盟学校委員会を中心に記述した。実際には、他の20の州サッカー連盟も独自の組織構造から成る学校委員会を設置している)

ーツの枠組みにおいて質的・量的に適切なサッカー教育の実現に努力すること、すなわち「学校サッカーの振興」(DFBの「青少年規則」より)にある。しかし一方で、DFB学校委員会は、この「学校サッカーの振興」という課題の達成には、DFBや州サッカー連盟、フェラインを含むフェ

ラインサッカー側と文部行政機関や学校を含む学校サッカー側とが、互いにパートナーとして理解し合い、相互支援を可能とするような協力関係が不可欠であるとし、そうした関係の構築に尽力することもまた、自らの重要な課題と認識している（Deutscher Fußball-Bund⁷⁾, pp. 37-39)。つまり、DFB 学校委員会は、「学校サッカーの振興」とともに、それを進める際の基盤となる「学校サッカーとの連携の推進」という課題を有するといえる。

こうした課題を達成するために、DFB 学校委員会は、各州予選を勝ち抜いてきた学校チームによって競われる連邦学校競技会「青少年はオリンピックを目指してトレーニングする」でのサッカー競技の準備・実施²⁶⁾や、学校サッカーの指導書（DFB-Schulfußballausschuß¹⁰⁻¹²⁾の作成などを行っている。しかし、DFB 学校委員会にとってこうした具体的な活動の展開はむしろ補足的な役割を果たすに過ぎず、あくまでその主機能は、委員会構成メンバーによる情報交換と、それに基づく各レベルの学校委員会の活動指針の決定という会議機能にある。つまり、DFB 学校委員会は、州サッカー連盟がDFBの政策指針を踏まえた実質的な政策実行者になるというDFBの独特なピラミッド構造を反映して、「学校サッカーの振興」や「学校サッカーとの連携の推進」のための指針を示しはするものの、その具現化を各州サッカー連盟の学校委員会の活動に委ねているのである²⁷⁾。

3. 実質的な政策実行者としての州サッカー連盟学校委員会

ーモデルとしてのニーダーラインサッカー連盟学校委員会ー

会議機能が主であるDFB 学校委員会の指針に基づき、21に及ぶ各州サッカー連盟の学校委員会が、それぞれの地域の特色に応じた活動を展開しているということは、各学校委員会の組織構造や活動内容にかなりの相違が見られることを意味する。それはすなわち、本論稿のテーマである「特別行事」の内容が各学校委員会によって異なってくるということでもある。従って、ここで取り上げる州サッカー連盟学校委員会や「特別行事」の事例は必ずしもドイツ全州の実態を反映するものではない。しかし、各学校委員会が、活発な活動を展開しているいくつかの学校委員会をモデルとして、その組織構造や活動内容を整備・発展させようとしている状況に鑑みて²⁸⁾、本項では特に、そうしたモデル的位置づけにある学校委員会を事例として取り上げ、分析することにした。具体的には、最も進んだモデルといわれるニーダーラインサッカー連盟（Fußballverband Niederrhein：以下FVNと略す）²⁹⁾学校委員会を事例に、政策実行者としての州サッカー連盟学校委員会が、どのような組織構造に基づいて、どのような活動を展開しているのかを概説していく。

3.1 FVN 学校委員会の組織構造

FVNの学校委員会は、リューパーツ（Lüpertz, R.）を委員長として、女性を含む他の3名の委員によって構成されている。これら4名の委員会メンバーは、全員が学校の教師を本業としている。教師である学校委員会のメンバーは、FVN本部で常時活動できるわけではない。従って、FVN学校委員会も、原則的にはDFB 学校委員会と同じく会議機能が主となる。しかし、両者には決定的な相違が存在する。それは、既に指摘しているように、DFB 学校委員会が主に情報交換の場であ

るのに対して、FVN 学校委員会は、学校やフェラインに直接的に関わる基本政策の立案とその実現のための具体的な施策の計画・実施を課題にしているということであり、さらにまた、そうした課題を実行可能とする、会議機能を主とする学校委員会の限界を補うための、人的・組織的支援の体制が整備されているという点である。FVN 学校委員会が他の学校委員会のモデルとなりうる多様な活動を展開できている理由として、特にこの人的・組織的支援体制の整備が挙げられよう。例えば、FVN 青少年部局は、その専任指導者でもあるハイン（Hain, U.）を責任者として、学校とフェラインの連携の推進を目的とする「学校とフェライン」課を FVN 本部内に特別に設置し、その広範な活動を通して学校委員会を強力にサポートしている。さらに、FVN 青少年部局に所属するエーレン（Ehlen, R.）は、学校委員会の委員長リュールベルツとの緊密なコンタクトに基づいて、後述の「特別行事」の1つである「ゼップ・ヘルベルガーの日」での計画、組織化、準備、実施等に関する実質的な責任者を務めるなど、学校委員会の活動を支えている^{注30)}。

なお、以下の FVN 学校委員会の具体的活動事例の分析（次項の「特別行事」に関する分析も含めて）では、組織構造上厳密には学校委員会の活動とは区別されるべき、上述の「学校とフェライン」課のハインや青少年部局のエーレンの活動を、学校委員会と緊密に関わり合って展開される活動として、学校委員会の活動の一環とみなすことにする。

3.2 FVN 学校委員会の活動内容

上記のような組織構造を有する FVN 学校委員会は、おおよそ次の4つの領域に関して活発な活動を展開しており、他の州サッカー連盟学校委員会のモデル的役割を果たしている^{注31)}。

(D) 学校とフェラインが共同参加する「特別行事」の開催

学校委員会は、学校と FVN に登録されているフェラインとが協力関係を作り上げる契機となるような「特別行事」を実施している。この「特別行事」は、例えば学期間や学校年度間に行うような長期にわたる継続的な施策ではなく、原則的に1日から数日で終了する単発的な施策である。それは、大きく次の2つのタイプに分類される。

- (1) 「ゼップ・ヘルベルガーの日（Sepp-Herberger-Tag）」に代表される、ある地域における多数のフェラインとその近郊の多数の学校が一堂に集まって開催される行事。
- (2) 「ファスツィナチオン・フスバル（Faszination Fußball）」に代表される、原則的に単一の学校と単一のフェラインが対象となって開催される行事。

本論稿の主題でもあるこれら2つの「特別行事」の内容については、次項で詳述する。

(E) 学校教師のためのサッカー講習会の開催

FVN 学校委員会は、年に数回、NRW 州の文部行政機関の協力・支援の下で、FVN 本部に隣接するシュポルトシューレにおいて学校の教師を対象としたサッカー講習会を開催している。その講習対象は、大学でスポーツに関する十分な専門教育を受けていない場合も多い基礎学校の教師^{注32)}に重点が置かれている。ただし実際には、学校委員会による講習会活動は、参加者が女性教師に限定されているコースや、基礎コース修了後に参加が認められる発展コース、中等教育段階前期の教師

を対象とするコースなど多様に展開されている。これらの講習会では、参加者の特性に応じたやや異なる内容が実施されているものの、男女共学の正課スポーツ授業の展開を念頭に置いた、サッカーの基礎的実技および理論の講習に重点が置かれている点では共通している。

筆者が観察調査した中等教育段階前期の教師を対象とする講習会^{注33)}を例に取れば、実技のテーマとして、キック、ボールコントロール、パスといった基本技術とともに、フリーランニングやパスをもらう動きといった個人戦術が学ばれている。これらのテーマでは、正課スポーツ授業における男女共学や生徒間の技能格差を考慮した、全ての生徒たちが習得可能である基本的な学習内容を取り上げている。これは、学校委員会が基礎的な技術および戦術能力の獲得を正課スポーツ授業の枠組みでのサッカー教育、すなわち正課サッカー授業の重要な課題と位置づけているためであろう。理論講習では、青少年の障害やサッカーの技術、戦術、コンディション、ルールなど、かなり広範な視点からテーマ選択がなされている。しかし、その内容は、実技内容と同じく、非常に基本的なレベルにとどまる。つまり、参加者は講習会でサッカーの基礎的な知識を身につけ、それを応用した形でのサッカー教育を学校で展開するよう期待されているといえよう。また、理論講習で特筆されるべきことは、「学校とフェラインの連携」というテーマに頻繁に言及されていた点である。例えば、「ゼップ・ヘルベルガーの日」や「ファスツイナチオン・フスバル」という学校とフェラインが共同参加する「特別行事」に関する詳しい紹介がなされたり、今後の学校とフェラインの連携のあり方に関するディスカッションの時間が設けられ、参加者による活発な意見交換が行われたりしている。こうした状況からは、講習会活動が、学校におけるサッカー教育の質の向上ばかりでなく、「学校とフェラインの連携推進」について啓蒙的な効果を発揮するよう期待されていることが分かる。

(火) 文部行政機関との調整

学校でのサッカー教育は学校スポーツの枠組みで実施される。従って、「学校サッカーの振興」を目指す FVN 学校委員会の活動は、学校教育や学校スポーツに責任を有する文部行政機関との相互理解を不可欠とする。例えば、上述の学校教師対象のサッカー講習会活動が、特にデュッセルドルフにある NRW 州文部省をはじめとする、文部行政機関との協力を前提として実現していることから分かるように、州内の文部行政機関の理解なしに学校委員会が十分な活動を展開することは容易でない。

こうした理由から、学校委員会は、文部行政機関、わけても文部省との話し合いの機会を定期的に設けている。そこでは、学校委員会によって具体的な活動内容が報告されるとともに、文部行政機関側への支援要請も行われる。

(水) 学校サッカーのための指導書の作成

FVN 学校委員会は、学校サッカーのための指導書を 2 冊作成している。まず 1 冊目は、「学校での子どものサッカー」(Schulfußball-Ausschuß des FVN³⁸⁾)である。これは、第 1～6 学年までの生徒たちを対象とする学校でのサッカー教育のための小冊子である。そこでは、6 年間で 3 段階に分けて、それぞれの学習目標と授業モデルが示されている。その内容的特色は、サッカーの楽しさや

喜びを理解させるのに適した具体的な練習方法やゲームが多数紹介されている点であろう。

2冊目の指導書は「ファスツィナチオン・フスバル」(Schulfußball-Ausschuß des FVN³⁹⁾)である。この小冊子は、上記の、学校とフェラインが共同参加して実施される「特別行事」(具体的な内容は後に詳述)に関する手引き書である。この手引き書は、学校教師やフェライン関係者に、この「特別行事」がどのような目的で、具体的にどのように実施されているのかを分かりやすく示すとともに、実際にこの「特別行事」を開催する際の具体的な実践モデルを提示してくれている。

以上のように、FVN 学校委員会は、DFB 学校委員会が掲げる「学校サッカーの振興」と「学校サッカーとフェラインサッカーの連携の推進」という目標・課題の達成のために、管轄地域を対象とする、上記4領域における活発な活動を展開している。これらの活動は、各々無関係に独立して実施されているというわけではない。例えば、学校教師のためのサッカー講習会では、「特別行事」についての啓蒙活動がなされており、後述の事例にあるように、この講習会参加をきっかけに参加者の勤務学校と近郊フェラインによる「特別行事」が開催されることも少なくない。また、「特別行事」や学校教師を対象とする講習会の開催には、NRW州の文部省をはじめとする、文部行政機関との調整が必要であるし、学校サッカーのための指導書は学校教師を対象とする講習会に使用されたり、「特別行事」の実施の際の手引き書となったりしている。このように、4つの領域での活発な活動が相互に緊密な関係を保ちながら、相乗的な効果をもたらすよう展開されているという点に、FVN 学校委員会の活動に関わる大きな特色を見出すことができる。

(協) 「特別行事」の内容と特色—FVN 学校委員会の「ゼップ・ヘルベルガーの日」と「ファスツィナチオン・フスバル」を事例として—

前項で述べたように、他の学校委員会のモデル的位置づけにある FVN 学校委員会は、学校とフェラインとの協力関係の促進を意図したサッカーイベントを開催している。このイベントは、通常1日から数日で終了するため、例えば課外スポーツクラブでの活動のような学期間や学校年度間など長期にわたる継続的施策とは区別され、単発的な「特別行事」と呼ばれる。「特別行事」は、その開催形態上、(田)ある地域における多数の学校およびフェラインが一堂に集まって実施されるもの、(月)単一の学校と単一のフェラインが対象となって実施されるもの、という2つのタイプに分類される。本項では、ドイツ全州で開催される「特別行事」の代表的事例として、この FVN 学校委員会の2つのタイプの「特別行事」を取り上げ、それぞれの内容と特色を明らかにしていく。

1. 「ゼップ・ヘルベルガーの日」の内容と特色

—ある地域における多数の学校およびフェラインが一堂に集まって開催される「特別行事」の事例—

長きにわたり旧西ドイツ代表チームを率い、1954年のスイス・サッカーワールドカップも制した、かつての名監督ゼップ・ヘルベルガー(Herberger, S.)に因んで命名されたこの「特別行事」は、

地域のフェラインと学校、特に基礎学校との協力を促進するために、年に1度 FVN 学校委員会によって開催されている。「ゼップ・ヘルベルガーの日 (Sepp-Herberger-Tag: 以下 SHT と略す)」は、FVN の下位組織である郡サッカー連盟管轄下の1つの地域が選ばれ実施される。この SHT の開催地域は全14に及ぶ郡サッカー連盟に順次割り当てられる。SHT の実施に際し、FVN 学校委員会は実施プログラムの構成・進行、開催当日の準備、事前の関係者・機関・組織との調整などの点で、特に企画・運営者としての役割を果たす。自治体、管轄の学校スポーツ委員会、管轄の郡サッカー連盟および同連盟に登録している地元フェラインも、SHT の開催協力機関・組織である。特に共同参加するフェラインは、プログラム進行を補助するために青少年指導者を派遣したり、ボールやユニフォームなどの用具を貸し出したりするなど、具体的な支援的役割を果たすことになる。一方、地元の基礎学校の生徒全員および教師は、SHT に招待される形で参加する。以下に、SHT の事例を述べていきたい。

1.1 SHT の事例分析

1994年9月21日、同年度の SHT が、グレーベンプロイヒ (Grevembroich) の南スポーツ競技場において開催された。SHT は9時30分から開始され、14時過ぎには全てのプログラムが終了した。筆者は、SHT 開催以前に、その準備・進行責任者であり、青少年部局員として FVN 学校委員会の活動を支えているエーレンに SHT に関するインタビュー調査を行うとともに、同学校委員会の側に加わって、上の日程で開催された SHT の観察調査を行った。以下の記述は、そうした一連の調査の結果に基づいている。

1994年度の SHT には、グレーベンプロイヒの地元の基礎学校14校から1,600名の生徒および教師が招待され、11の地元フェラインが、参加基礎学校とのコンタクトを求めて、ユニフォームの提供、審判や指導者の派遣などを通じた SHT への協力を申し出た。FVN の青少年部局員であり、学校委員会の活動をサポートしている、エーレンを中心に作成されたプログラムの内容が、芝グラウンドを備えた陸上競技場および土グラウンドから成るスポーツ競技場のそれぞれの場所において、参加フェラインから派遣された指導者の支援の下で、同時進行的に実施された。また、FVN 学校委員会や青少年部局のメンバーも、プログラムの進行のための指導・支援者として参加した。SHT のプログラムの内容は、次の5つの柱から成り立っていた。

(B) 第2・3・4学年サッカー大会

この大会は、主に第3・4学年の生徒で構成されるチームによって戦われるが、第2学年の生徒も参加は可能である。当日は全14の SHT 参加基礎学校から計16チームが出場した。1チームは最高13名から成り、大会開始前にメンバーリストが本部に提出されなければならない。試合は12分間のハーフコートにおける9対9 (ゴールキーパーを含む) の形式で実施されるが、選手交代は何回でも可能である。全16チームを4チームずつ4つのリーグに振り分け、先ず各リーグで総当たり戦を行う。各リーグの1位チームが決勝トーナメント、すなわち準決勝戦に進出し、次いで3位決定戦、決勝戦を戦うことになる。規定試合時間内で勝敗が決しない場合は、8mのペナルティーキック

ク合戦を行う。なお、審判は郡サッカー連盟が派遣する。

(用) 第2学年サッカー大会

この大会は第2学年の生徒を参加対象とする。当日は8校の基礎学校から1チームずつ、計8チームが出場した。1チームは最高13名から成り、大会開始前にメンバーリストが本部に提出されなければならない。1/4コートにおける9対9（ゴールキーパーを含む）の形式をとるが、選手交代は何回でも可能である。全8チームを4チームずつの2つのリーグに振り分け、先ず各リーグ内で前後半各8分の総当たり戦を行う。そして、各リーグの同順位チーム間で順位決定戦を実施する。規定試合時間内で勝敗が決しない場合は、8mのペナルティーキック合戦を行う。なお、審判は郡サッカー連盟が派遣する。

(火) リレー競争

ここでは、同一基礎学校の8名のメンバーによって構成されたチームが、スタート地点から10m離れた地点に立てられたフラッグを折り返してくるという形で、様々な種類のリレー競争を行う。その際、各種リレーは、3ないし4チームによる同時スタートに近い形態をとってはいるが、実際には各チーム別にタイムが測定されており、タイムの最も速いチームが、当該種類のリレーの優勝チームになる。第3および4学年の生徒が参加するが、各学年別にチームが構成されており、同学年チーム間で競われる。ここでのリレーの種類は次の5つである。なお、各種リレーの参加チームは全て同一というわけではなく、同じ基礎学校からの参加であってもエントリーチームのメンバーは各種リレーで異なる。

- (1) バトンリレー—バトンを使った通常の走りリレー。
- (2) サッカードリブルリレー—サッカーボールをドリブルして行うリレー。
- (3) バランスボール跳ねりリレー—子どもたちが、バランスボールに座って、そのままボールごとぴょんぴょん跳ねて前進するリレー。
- (4) 袋両足ジャンプリレー—下半身をすっぽり覆う袋に両足を入れて、足を自由に使えないようにし、走る代わりに両足でぴょんぴょん跳ねて前進するリレー。(写真1)



写真1 リレー競争「袋両足ジャンプリレー」

(5) メディシンボール転がしリレーかなり重く、転がりにくいメディシンボールをかがみながら、手で押し転がし前進するリレー。

なお、これらのリレー競争とは別に、サッカースラローム競争が実施される。これは、3 m 間隔で立てられた5本のポールをドリブルでスラロームして競うリレーである。これも最速タイムのチームが優勝となる。

(水) サッカー5種競技

SHT に招待されている生徒たち全員が、この5種目から成るサッカースキルコンテストに参加している。また、教師や生徒たちの保護者も参加することができる。各種目が行われる場所はそれぞれ指定されており、フェラインの指導者をはじめとする複数の指導・支援者が各々の場所に割り振られている。これらの指導・支援者は、競技方法の説明、実技指導、あるいは全員の生徒たち、参加教師、保護者に配布される個人記録カードへの記入などの役割を担っている。各種目には、第1・2学年、第3・4学年、教師、保護者それぞれのパフォーマンス目標が設定されており、各区分に応じて配られた個人記録カードに、そのパフォーマンス目標を達成できたかどうかを書き込まれる。4ないし5種目のパフォーマンス目標がクリアできれば、達成証明書を受け取ることができる。なお、ここでは次の5種目が実施されている。

- (1) スラロームドリブル—4つのコーンをドリブルでスラロームして、タイムを競う。
- (2) ゴールシュート—1.5m 幅のゴールへシュートを決める。ゴールからの距離は、6・8・10 m と学年に応じて設定される。各自2回試行する。
- (3) ロングキッカー—助走からのキックの距離を競う。各自2回試行する。
- (4) ボールリフティング—手以外の身体の部位を使って、ボールを地面に落とさないようにリフティングする。(写真2)
- (5) スローイン—サッカーのスローインによる飛距離を競う。各自2回試行する。

(木) その他のゲームやアトラクション

生徒たちは、SHT において上記4つの区分のどこにも属さない、例えばさいころキックゲーム、



写真2 サッカー5種競技「ボールリフティング」

シュートゲーム、サッカーボーリングなどのゲームに自由に参加することができる。これらのゲームでは、参加した全ての生徒にそのパフォーマンスに応じて、FVNのバッジ、ステッカー、パスケースなどの賞品が贈られる。ゲームの他にも、サッカークイズ大会や、FVN管轄地域にあるブンデスリーガフェラインのプロフェッショナルプレーヤーたちによるサイン会などの催しが実施される。また、地元ギムナジウムの年長生徒たちの協力によって、サッカーとは直接関係のない運動や遊戯、例えば竹馬、ローラースケート、卓上ゲームなどのアトラクションコーナーも開設されており、生徒は自由に利用することができる。

1.2 SHTの特色

ここまでSHTのプログラムの具体的な内容を明らかにしてきたが、以下その特色をまとめてみたい。

まずSHTの特色として挙げられるのは、それが基礎学校年代の生徒を対象に開催されている点であり、プログラムの内容もこの年代の子どもたちに合わせたものに工夫されている点であろう。例えば、2つのサッカー大会では、コートの大さやプレーヤー数などの観点から子どもたちの発達に配慮した試合が実施されており、そうした試合を通して彼らに先ずサッカーの原初的な魅力を伝えようとしている。また、サッカー5種競技では、サッカーに特徴的なスキルをコンテスト形式で簡便に体験させている。このようにサッカー種目に専門的な運動といえども、高度なスキルや知識を必要とするものではなく、男女を問わず子どもたちがサッカーの魅力を体感できる、実施容易な内容のものが多く取り上げられている。また、さいころキックゲーム、サッカーボーリングなど、サッカーに関連するゲームも行われており、子どもたちはゲームを楽しみ、サッカーに関わる賞品を手にすることで、サッカーをより身近に感じることができるようになる。一方で、サッカーに特化されていない全般的な運動に関しても、様々な用具を用いた、多様な形態での各種リレー競争に見られるように、この年代の子どもたちの興味・関心を引くような楽しい内容のものとなっている。実際に、このSHTでは、男女を問わずして、サッカーやその他の運動およびゲームに熱中する子どもたちの喜びに満ちた表情が目についた。

さらには、再三言及しているような、多数の基礎学校とフェラインが一堂に集まるというSHTの開催形態が、その特色として指摘されるべきであろう。また、基礎学校教師や保護者が、SHTに参加可能であることも特筆されるべきだろう。このような実施形態によって、非常に大勢の生徒たちが同一イベントに共同で参加できたり、子どもたちに異なる基礎学校の生徒との競争や交流、教師や保護者とのより緊密なコミュニケーション、見知らぬフェライン指導者との触れ合いなどが可能となり、日常生活から離れた、いわゆる「フェスティバル」のような開放的な雰囲気が作り出されている。そうした「フェスティバル」の雰囲気が、SHTでの子どもたちの生き生きした姿に表れていたように思われる。さらには、サッカーや運動に熱中する子どもたちの姿を、教師や保護者が間近で見ることができるということは、SHTにとって極めて重要な点であろう。なぜなら、この年代の子どもたちの行動が、教師や保護者によって大きく影響を受けるとすれば、教師や保護

者による SHT に関する良好な印象が、子どもたちのサッカーや運動、あるいはフェラインに対する態度の形成に以後肯定的に作用する可能性が高いからである。

ただし一方で、こうした SHT の開催形態は、「特別行事」の大きな目標である「基礎学校とフェラインとの連携の促進」という観点からすれば、必ずしも最適とはいえない面もあろう。それは、SHT の開催形態からして、参加フェラインの関与の仕方が、ユニフォームの貸し出しや子どもたちの指導・支援者の派遣など、かなり限定的になったり、参加フェライン数の多さによって各フェラインの存在を個別に際立たせることが困難になってしまう点である。生徒たちはもちろんのこと、教師や保護者も、ある特定のフェラインへの印象を抱き難く、従って生徒たちが特定のフェラインに加入することや、ある基礎学校とあるフェラインとの協力関係を形成することは、それほど容易ではないようにも思える。この SHT に特有な開催形態は、開放的な「フェスティバル」の雰囲気を生み出し、子どもたち、教師、保護者に好ましい影響を及ぼしている一方で、その開催趣旨でもある基礎学校とフェラインとの連携を生じ難くしているともいえそうである。

しかし、こうした各フェラインの存在感の薄さや、それに伴う基礎学校とフェラインとの協力関係の構築の難しさという若干の問題点は見られるものの、総合的には、SHT は、基礎学校年代の子どもたちをサッカーや運動へと向かわせ、教師や保護者にも肯定的な影響を及ぼしたという点で、非常に有意義なイベントであったと評価できよう。

2. 「ファスツィナチオン・フスバル」の内容と特色

—単一の学校と単一のフェラインが対象となる「特別行事」の事例—

2.1 「ファスツィナチオン・フスバル」とは

この「ファスツィナチオン・フスバル (Faszination Fußball: 以下 FF と略す)」と呼ばれる「特別行事」は、「魅力」という意味の「ファスツィナチオン (Faszination)」と「サッカー」を意味する「フスバル (Fußball)」という語から成っており、「楽しいサッカー」といった日本語訳が適切といえるのかもしれない。

この FF は、州サッカー連盟の 1 つであるラインラントサッカー連盟 (Fußballverband Rheinland) で行われていた同名の「特別行事」がモデルとなっており、FVN 学校委員会は 1991 年より継続して、年間 5・6 回の頻度で開催している。通常 FF は、FVN の管轄地域内の単一の基礎学校と単一のフェラインが参加して、当該学校の教室とスポーツ施設を主会場に開催される。原則的に午前 8 時より開始され、おおよそ 13 時には終了する。例外的には、特に基幹学校の第 5・6 学年の生徒が対象となったり、複数のフェラインが参加したり、学校プロジェクト週間の一環として複数日実施されることもある。

FF の手引き書によれば (Schulfußball-Ausschuß des FVN³⁹, p. 7)、その基本目標は、まさに名称が示す通り、参加生徒たちにサッカーの楽しさ、素晴らしさを伝えることである。そして、そうした基本目標の下に、次の 4 つの下位目標が設定されている。それは、(田)遊びの要素を含んだ、年齢に応じた形態で、子どもたちにサッカーというボールゲームをよく知ってもらうこと、(用)教師に正

課スポーツ授業のための試合や練習の方法を教示すること、(火)フェラインに学校という場での青少年活動の展開へと関心を向けさせるチャンスを与えること、(水)学校とフェラインとの長期的な協力のための基盤を生み出すこと、という4つの目標である (Schulfußball-Ausschuß des FVN³⁹⁾, p. 7)。

FFの開催は、FVN 学校委員会に地域の学校あるいはフェラインからその開催要請がなされることを契機に実現する。例えば、ある基礎学校からFVN 学校委員会にFFの開催が要請された場合、FVN 学校委員会は、その基礎学校の近郊に位置する複数のフェラインに、FFへの参加に関心があるかどうかを問い合わせる。そして通常は、FVN 学校委員会が、FFに関心を有する1つのフェラインを選び出し、このフェラインと基礎学校との間に立って、日時、参加人数、実施内容、指導・支援者、用具などの調整・手配を行う。フェラインの方からFVN 学校委員会にFF開催の要請がなされる場合は、逆に近郊の複数の学校にその開催の可能性を打診し、参加校が選ばれる。複数の学校がFF開催を希望した際は、FVN 学校委員会が、場所や施設などの点で最もFF開催の条件に適した1校を選択するようである。FVN 学校委員会によれば、学校側は、例えば夏休みや復活祭休みの前など、比較的生徒の気分がリラックスしている時期に、通常の授業とは異なる形での楽しい体験をさせたいという理由からFFの開催を希望する場合が多い。フェライン側のFF開催希望の理由は、特に学校との協力関係の構築による青少年会員の新たな獲得と、地元新聞報道などによる広報活動の活性化の2点であるという。

FFのプログラムの内容は、FVN 学校委員会によって作成されたFFの手引き書に沿って決定されており、プログラムに必要な特定の用具も、それを所有するFVN 学校委員会によって準備される。また、FVN 学校委員会は、FF開催当日そこでの実施内容に精通する指導・支援者を数名派遣し、彼らはFFのプログラム進行のリーダー的な役割を果たす。一方、学校側は、教室や講堂を会場として提供したり、教師を指導・支援者として配置したりするし、フェライン側も、グラウンドをはじめとするスポーツ施設の提供、青少年指導者の派遣、ユニフォームやボールといった用具の貸し出しなどを行う。

なお、ここでは、FVN 学校委員会の一員に含めているFVN 青少年部局「学校とフェライン」課のハインの活動に言及しておく必要がある。FVN 学校委員会がFF開催の調整・準備・実行組織として極めて重要な役割を果たしているのは上述の通りであるが、ハインは、そうしたFVN 学校委員会によるFF開催準備過程の活動の殆どと、FF当日の指導・支援者の中心人物としての役割を担っている。つまり、FVN に特別に設置されている「学校とフェライン」課のハインは、このFFの開催に必要な不可欠な存在であるといえる。

2.2 FFの事例分析

1994年5月24日、アルスフェルト基礎学校 (Katholische Grundschule Alsfeld) とSC シュテークラーデ (SC Glück-Auf Sterkrade 1937 e. V.) との間で、FFが開催された。基礎学校の教室およびビデオルームとフェラインのグラウンドが主会場となった。筆者は、FF開催以前に数回にわたって、その準備・進行責任者でもある「学校とフェライン」課のハイン氏にインタビュー調査を行う

とともに、同学校委員会の側に加わって、上の日程で開催されたFFの観察調査を実施した。以下の記述は、そうした一連の調査の結果に基づいている。

ここで取り上げたFFの事例は、基礎学校側からFVN学校委員会に実施要請がなされたことを契機に実現した。アルスフェルト基礎学校に勤務するロイシェンバッハ（Reuschenbach, G.）が、1993年5月にFVN学校委員会による講習会「基礎学校教師のためのサッカー」に参加した際にFFのことを知り、その開催をFVN学校委員会に要請したのである。FVN学校委員会は、アルスフェルト基礎学校の要請に応じて、その近隣に位置するフェラインのFF実施・参加の可能性を探った。そして、FVN学校委員会の調整によってアルスフェルト基礎学校に隣接するSCシュテークラーデのFFへの参加が決定した。隣接する両者の間には、以前よりアルスフェルト基礎学校が正課スポーツ授業をはじめとする学校スポーツ活動のためにSCシュテークラーデのグラウンドを使用するという形での関わりは見られたが、それ以外の緊密な協力関係は殆ど存在しなかった。

プログラムは教室での活動内容とグラウンドでの活動内容より構成されている。アルスフェルト基礎学校の第1～4学年の生徒全員が、先ず8時15分～9時45分まで各教室でのプログラムに参加し、次いで10時30分～12時35分までグラウンドで活動する。そして最後に、表彰と挨拶によってFFは終了する。以下では、各教室で実施されるプログラムの内容とグラウンドで実施される内容をそれぞれ詳しく述べていきたい。

2.2.1 教室で実施されるプログラムの内容について

上にも述べたように、8時15分より各学年毎に教室でのプログラムが開始された。その際、各学年を1名の指導・支援者が担当しているが、その任にはハインをはじめとするFVN学校委員会の関係者とFFの開催を要請したラオシェンバッハが当たった。なお、筆者は、このプログラムの内容の調査に際して、事前にインタビュー調査を実施していたハインが担当する第2学年の生徒たちの活動を観察対象とした。

教室で実施される内容は、サッカーボールを蹴るといったようなサッカー独自の激しい身体活動を含むものではなく、次のようなサッカーに関連する様々な形態での楽しいゲームであった。

先ずハインは、第2学年の男子および女子全37名を4つのチームに振り分け、生徒たちの希望に応じて、各チームにブンデスリーガフェラインの名前をつけた。そして、教室で行われるゲームは、このチーム間で争われ、以下に示される全てのゲームで獲得した点数の合計が競われた。

(H) 絵解きなぞなぞゲーム

最初に実施されたこのゲームは、1名の生徒がOHPを用いて、ペンで実際に描き出す、例えばゴールキーパーやサッカースパイクなどのサッカー関連用語についての絵から、その他の生徒たちが当該の用語を言い当てるというものである。

(M) ワン・ツー・スリーゲーム

これは、FVN学校委員会が作成したサッカーに関する三者択一問題によるゲームである。OHPにより映し出された問題について、各チームの代表解答者4名はそれぞれ、3つの選択肢の中から

1つを解答として選択する。解答者たちは、1・2・3と仕切られた解答ゾーンの前に立っており、生徒全員の「1、2、それとも3」のかけ声に合わせて、それぞれが選択した解答番号と一致する解答ゾーンめがけてジャンプする。4名は同時にそれぞれが選んだ解答番号にジャンプするため、互いの身体が接触・交錯した状況になる場合も多く、子どもたちにとってはその様子が面白いようである。ここで出される問題は、サッカーに関する非常に基本的な内容のものが多い。例えば、「サッカーでは、体のどの部分とボールが触れてはいけないの?」という問題が出題され、それに対して「1. 手」「2. 頭」「3. 胸」という選択肢が提示されている。筆者には、こうした基本的な問題に対してサッカーと疎遠である生徒たちも大いに興味を示し、楽しくゲームに参加していたように見えた。

(火) さいころビンゴ

このゲームでは、スポンジ素材でできた大きなさいころを用いる。各チームの代表者は、順番にさいころを教室の壁に向かって蹴り、そこで出たさいころの目と一致する、あらかじめ黒板に張ってある6枚のさいころの目の絵をひっくり返していく。そのさいころの目の絵の裏には、FVNのマスコットキャラクターのサッカー少年が描かれており、各チーム6回以上のキックの後に全てのさいころの目が出れば、サッカー少年の絵が完成する。一番最初に絵が完成したチームの勝ちとなる。実際のゲームでは、あっさりと全てのさいころの目が出るということは殆どなく、既に裏返っているさいころの目が何度も出たりして、その完成までの足踏みの状態で子どもたちは非常に盛り上がっていた。(写真3)

(水) ユニフォーム着替えリレー

これは、各チーム代表者3名によるユニフォーム着脱のリレーである。各チーム1名ずつが、先ずユニフォーム一式、すなわちシャツ、パンツ、ストッキングをできるだけ素早く着て、そして素早く脱ぐ。それを3名によるチーム対抗リレーで競うわけである。教室で実施されるプログラム内容では、このゲームが唯一、全チームにより同時進行的にスピードを競うものであるため、子どもたちには非常に好評であったように見えた。



写真3 さいころビンゴ

(木) アニメーションビデオフィルム「動物たちのサッカー」の鑑賞

各学年の生徒たちは、上記4つのゲームの間のいずれかに（筆者が観察した第2学年は(月)と(火)の間）教室からビデオルームに移動し、アニメーションビデオフィルム「動物たちのサッカー」を鑑賞した。このビデオフィルムは、動物たちによるサッカーの試合の様子をコミカルに描いたもので、子どもたちはとても面白がって見ていた。実写によるサッカーのプレーでなく、アニメーションによる動物のサッカーの上映という発想は、基礎学校年代という子どもたちの年齢やあまりサッカーに親しんでいなかった子どもたちの興味の喚起という点を考慮しても、非常に適したものであったように思える。

教室で実施されるこれらのプログラムは、大変工夫された内容で構成されているように感じた。例えば、ハインの巧みな支援にもよって、上記のゲームでは、生徒全員が必ず1回は所属チームの代表として参加しているし、解答者として何度も発言する機会を得ている。ゲーム自体の内容も、基礎学校年代の子どもたちがサッカーに関心を持ってくれるような、理解しやすく、楽しめるものが多い。また、男子よりも女子に優先的にこれらのゲームに代表者や解答者として参加する機会が与えられており、日頃男子よりもサッカーに親しむ機会が少ない女子に、ゲームを通してもっと広くサッカーに関心を持ってもらおうという FVN 学校委員会の意図が感じられた。

2.2.2 グラウンドで実施されるプログラムの内容について

教室でのプログラムの終了後、生徒たちはスポーツウェアに着替え、10時30分にアルスフェルト基礎学校に隣接する SC シュテークラーデのグラウンドに集合した。教室でのプログラムの実施の際の中心的役割を果たした FVN 学校委員会の関係者およびアルスフェルト基礎学校の教師とともに、SC シュテークラーデの関係者もグラウンドに集まり、そこでのプログラムの展開に協力した。グラウンドでのプログラムは、以下のような、サッカーに関連する身体活動を伴う実技内容が中心であった。グラウンドでは、第1・2学年のグループと第3・4学年のグループがそれぞれ、芝コートでのサッカーの試合と、土のコートでのそれ以外のプログラムに分かれて活動する（先ず、第1および2学年がサッカーの試合をし、その時第3および4学年はそれ以外のプログラムを実施する。次いで、第3および4学年が試合、第1および2学年がそれ以外のプログラムになる）。生徒たちは全員全てのプログラムの内容を体験する。

(日) サッカーの試合

生徒たちは全員、ハーフコートでのサッカーの試合に参加した。ただし、第1・2学年の試合形式と第3・4学年の試合形式とは若干の相違が見られた。

(1) 第1学年および第2学年の試合

第1学年および第2学年の試合は、両者ともそれぞれ男女混合チームの対戦であった。第1学年の試合はキーパーを含めて9対9の試合、第2学年の試合はキーパーを含めて13対13の試合というように、参加選手数の違いは見られるものの、基本的にはサッカーの正式なルールに則って試合は行われた。審判は SC シュテークラーデの関係者が務めた。試合時間は20分である。

(2) 第3学年および第4学年の試合

第3学年および第4学年の試合は、第1学年および第2学年の試合とは異なり、男子チーム間の対戦、女子チーム間の対戦と、男女別々で実施された。男女共修が原則である正課スポーツ授業では実施しにくい男女別修が、課外スポーツ活動の一環であるFFにおいて行われた。この試合の審判もSCシュテークラーデの関係者が務めた。試合時間は20分である。

(3) 生徒チーム対教師・保護者・フェライン関係者合同チームの試合

こうした各学年毎の試合の他に、各学年から選ばれた生徒たちのチームと教師、保護者たち、さらにはSCシュテークラーデ関係者から構成されたチームとの対戦も行われた。試合に参加していない生徒たちはフィールドの周囲で観戦・応援することになる。この試合は、教師、フェライン指導者、保護者の交流の場と捉えられている一方で、子どもたちが大人たちに挑戦する機会とも認識されている。子どもたちは、大人たちをサッカーで負かすことに大きな魅力を感じ取っている。従って、この「子ども対大人」の試合は、FFのハイライト的な企画として参加者大変好評であるという。また、大人たちも、子どもたちとの交流の機会としてこの試合に積極的に参加している。当日は特に母親たちの参加が目立った。(写真4)

(用) サッカー3種競技

生徒たちは全員、この3種目から成るサッカースキルコンテストに参加する。下にも示すように、各種目ではパフォーマンスに応じた点数が規定されている。生徒たちの点数は、各種目の実施場所に配置された指導・支援者によって、各生徒に配られた得点用紙に記入されるとともに、企画・運営者側が持つ全生徒のリストにもその点数は書き込まれる。各生徒の得点用紙に全3種目の各得点および合計得点が示されることで、生徒たちは自身のパフォーマンスに見合った得点を知ることができるし、企画・運営者の側もまた生徒全体の得点リストから成績優秀者を選出することができる。実際に、FFの閉会式では、コンテストの上位成績者男女各3名が、その順位に応じて記念品を受け取っていた。



写真4 生徒チーム対教師・保護者・フェライン関係者合同チームの試合

(1) ゴールシュート

この競技は、各生徒が、通常のゴールよりもかなり小さい、幅1mのゴールをめがけてシュートするというものである。第1・2学年は約4m、第3・4学年は約5m離れた地点から、ゴールキーパーがいないゴールに向かって正確にシュートしなければならない。各自3回試行する。ゴールインすれば5点となる。また、左右のゴールポストの外のそれぞれ1m離れた地点にフラッグが立ててあり、たとえシュートがゴールを外れても、ゴールポストとそのフラッグの間を通過すれば3点となる。全3回の合計点が得点となる。

(2) スラロームドリブル

この競技では、第1・2学年は2つのコーンの間を、第3・4学年は3つのコーンの間をドリブルでスラロームし、その往復タイムを競う。30点からタイム分だけ引いた点が得点になる。各自2回試行し、良い点数を得点として記録する。

(3) スローインシュート

地面に大小2重に描いてある円の中央にコーンが立ててあり、その窪んだ先端にボールが置かれている。サッカーのスローインの方法で、ノーバウンドでコーンに当ててボールを落とせば5点となる。コーンにより近い、小さな円の内側にボールが落ちた場合は3点、コーンから遠い方の、大きな円の内側にボールが落ちた場合は1点となる。各自3回試行し、その合計点が得点になる。

(写真5)

(火) サッカーボーリング

これは、FVN学校委員会が所有するボーリングピンおよびそれを載せる台を使用したキックボーリングゲームである（ただしこのFFではピンを載せる台が用いられていなかった）。全部で7本のピンを、約3～4m離れた場所からキックしたグラウンダーのボールによってできるだけ多く倒すことを競う。各自3回試行し、倒れたピンの合計が得点となる。ただし、1回の試行毎にピンは最初の7本の状態に戻される。より多くのピンを倒すために正確かつ強いキックが求められるゲームである。このゲームの実施後、生徒全員にその得点に応じてバッジなどの賞品が与えられる。

(写真6)



写真5 サッカー3種競技「スローインシュート」

(水) さいころキックゲーム

これはスポンジ素材のさいころを用いたゲームである。以下の図3のように区切つてある得点ゾーンの手前2mの地点からさいころをキックする。キックされたさいころが止まったゾーン（さいころの面の半分以上が重なっているゾーン）の得点とそのさいころの目の合計が得点となる。各自2回試行して、その合計得点を競う。ただし、さいころが得点ゾーンから外れてしまった試行は0点となる。このゲームも、サッカーボウリング同様に、得点に応じて賞品が与えられる。

(木) ペナルティーキック

子どもたちは全員、正規のゴールを用いた、11mという正規の距離からのペナルティーキックを蹴る。その際のゴールキーパーは、FF参加フェラインであるSCシュテークラーデの成人女子チームのゴールキーパーが務めた。

(金) サッカークイズ

グラウンドでは、実技以外にもサッカークイズが実施された。これは、第1学年を除く子どもたち全員が、クイズ用紙に示された二者択一あるいは三者択一のサッカークイズに解答するものであ



写真6 サッカーボウリング

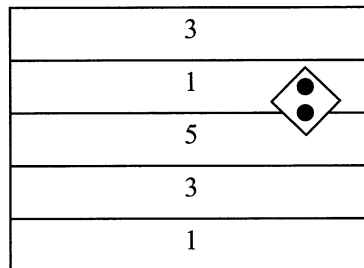


図3 さいころキックゲームの得点ゾーン

(この試行の得点は、得点ゾーンの1点とさいころの目の2点を合計した3点となる)

る。解答用紙は企画・運営者側に提出され、採点される。クイズの内容は、例えば「サッカーの試合は何によって開始されるか？」（選択肢「キックオフ」「ペナルティーキック」「スローイン」といったサッカーに関する非常に基本的な問題とともに、このFFに関連する問題も出題されている。例えば、「今日のプロジェクトを開催しているフェラインの名前は？」（選択肢「グリュック・アオフ・シュテークラーデ（Glück-Auf Sterkrade：SCシュテークラーデ）」「ロート・バイス・オーバーハオゼン（Rot-Weiß Oberhausen）」、「グリュック・アオフ・シュテークラーデでは、子どもたちのトレーニングに一度気軽に参加することができるか？」（選択肢「はい」「いいえ」）、「グリュック・アオフ・シュテークラーデでは、子どもたちが何曜日にトレーニングしているか？」（選択肢「月曜日」「火曜日と木曜日」「水曜日」といった、FF参加フェラインのSCシュテークラーデに関する基本情報が問題として出されている。これらの基本情報は、あらかじめ生徒全員に配布してあるFFの案内書やサッカー3種競技の得点用紙の裏面に記載されており、子どもたちはそれを参照しながら解答することができる。こうした問題を問うことによって、子どもたちにSCシュテークラーデに関する基本情報を伝達しているという意味で、このクイズは非常に有意義であろう。なお、このサッカークイズの成績優秀者が、閉会式の際に発表され、賞品が贈られた。

以上のようにグラウンドでのプログラムの内容は、その殆どが実技である。しかし、ここでは、生徒たちに対してサッカーの高度な達成能力が要求されているわけではなく、サッカーの楽しさをよく知るために、比較的広いコートで試合を多く体験させるとか、独特のボール（およびそれに類するもの）を使用した、難易度的にそれほど高くない身体活動を多く実施するなどしている。ただし、比較的容易な身体活動でありながら、それはサッカーボーリングに代表されるように、子どもたちの関心を引くような形態を取っており、大変工夫して行われていると感じた。

2.3 FFをきっかけとする基礎学校とフェラインのパートナー的協力関係の構築の事例

上述してきた教室およびグラウンドで実施されるFFのプログラムは、生徒たちにサッカーの魅力を伝えるという基本目標を十分に満たすものといえるだろう。しかし、その下位目標に明確に示されているように、FFはただの一過性のイベントとしてではなく、参加学校と参加フェラインとの継続的な協力関係の構築のきっかけとなるよう求められてもいる。このことは前項で分析したSHTにも当てはまる。従って、FFやSHTという「特別行事」の内容や特色に関する分析では、行事開催を契機として、その後に具体的にどのような協力関係が生じてきたのかという視点を含めることも極めて重要であると思われる。実際にFFでは、協力関係が生まれたいくつかの事例が報告されている。

FF開催の中心的役割を担っているハインは、FFにより構築が望まれる協力関係についての基本的見解を、筆者とのインタビューの中で次のように述べている。「FFの開催は、当該の学校とフェラインとの協力関係を促進するよう期待されている。しかし仮にFFによって動機づけされた生徒たちが、FF開催後間もなく当該フェラインに大量に加入したという報告がなされたとしても、我々FVN学校委員会は、その事実になんら大きな意義を認めることはない。なぜなら、我々はFFの

開催を通してそのような短期的な観点での学校とフェラインとの協力成果を達成したいわけではないからである。むしろ我々は、FF 開催をきっかけに今後両者が相互にパートナーとして理解し合い、助け合っていくという長期的な観点に基づく協力関係の確立を望んでいる。このような協力関係を作り上げるには、FF 開催後、学校とフェライン自らによる具体的行動の努力を不可欠とする。それは例えば、フェラインにはまだ入会していないものの、フェライン活動に関心を有する生徒対象のフェラインでのトレーニングの実施、フェラインのコーチによる課外スポーツクラブの指導、学校祭でのスポーツ活動やスポーツフェスティバルでの相互支援、施設や用具の共同利用、競技大会の際の審判やプレーヤーの不足の補充などである。FF 開催後、これらの具体的行動を通して、学校とフェラインとの協力関係が構築される必要がある」。すなわち、FVN 学校委員会は、FF の開催だけにとどまらず、それをきっかけとした学校とフェラインによるパートナー的協力関係の構築を極めて重要な課題とみなしているのである。

以下では、そうしたパートナー的協力関係の構築が目指された2つの事例を分析していきたい。

2.3.1 エベル基礎学校と VfR エベルとの協力事例

1993年9月15日、FVN 学校委員会の支援によって、エベル基礎学校 (Grundschule Ebel) と隣接の VfR エベル (VfR Bottrop Ebel) との間で FF が開催された^(注34)。前述したアルスフェルト基礎学校と SC シュテークラーデによる FF の事例と同様に、エベル基礎学校の教師が、1993年3月、FVN 学校委員会による学校教師を対象とするサッカー講習会に参加し、そこで FF に関する情報を得たことをきっかけとして、この FF は実現した。そこで実施されたプログラムの内容は、前述の事例で分析した内容とほぼ同じであった。

この事例において特徴的なことは、FF 開催に伴い、エベル基礎学校の学校長と VfR エベルの会長が、FVN 学校委員会委員長や管轄地域の教育行政代表者の立ち会いの下で、エベル基礎学校と VfR エベルが今後パートナーとして互いに協力していく旨の公式文書に合意・署名したという点である。すなわち、エベル基礎学校と VfR エベルの両者は、FF をきっかけとして、「今後のスポーツフェスティバルや学校祭での相互支援や用具の共同利用」(ハイン) といった長期的観点に立ったパートナー的協力関係の促進に努力することを正式に確認したのである。

こうしたパートナー的協力関係がもたらす効果について、エベル基礎学校の学校長フランツェン (Franzen, A.) は、「子どもたちは深刻な運動不足の状態にあるが、この問題を学校スポーツだけで解決することは不可能である。課外スポーツ活動は、その際の大きな手助けとなる。それは学校とフェラインとの協力を通じて実現する」と述べており、パートナーである VfR エベルとの協力が、テレビにかじりついている子どもたちをサッカーボールを追いかけるためにグラウンドへと導いてくれるよう希望している。また、VfR エベルの会長であるクラース (Kraass, W.) は、エベル基礎学校とのパートナー協力が、VfR エベルの各ユース年代のチームに基礎学校の生徒たちを新たな会員として毎年継続的に供給してくれればと期待している。

この公式文書への合意・署名によって、両者間にいかなる具体的活動の展開がもたらされたのか

に関しては、その後 FVN 学校委員会から詳細な報告はなされていない。しかしながら、そうした報告が欠けているとしても、FF をきっかけとして、長期的な視点に立ったパートナー的協力関係の確立の意志を文書によって公的に表明することになった本事例は、先にハインの言葉で示した、FF によって目指されている協力関係のあり方を体現するモデルの1つとして捉えることができよう。

2.3.2 シュトツフェラー・シュトラセ基礎学校と SC シュバルツ・バイスとの協力事例

1993年12月11日、FVN 学校委員会の主催によって、シュトツフェラー・シュトラセ基礎学校 (Gemeinschaftsgrundschule Stoffeler Straße) と SC シュバルツ・バイス (SC Schwarz-Weiß 06) をはじめとする地元の3フェラインとの間でFFが開催された^{注35)}。会場は主に基礎学校の教室および体育館が使用された。FF開催当日は土曜日であり、基礎学校は休みであったが、全校生徒約200名の内の約100名がFFに自発的に参加した。そこでのプログラム内容は、ここまで分析してきたFFの事例とほぼ同じであった。

シュトツフェラー・シュトラセ基礎学校の学校長であるノル (Noll, A.) は、「我々が教師として学校の午前の授業で取り組んだことが、午後にはフェラインにより引き継がれる。社会的統合あるいはルールの遵守ということもチームスポーツを通して学ばれる」と考えており、FFをきっかけとしたフェラインとの具体的な協力関係の確立に積極的であった。そしてSC シュバルツ・バイスもまた、シュトツフェラー・シュトラセ基礎学校との協力関係を望んでいたため、FF開催後に両者間の協力が実現することとなった。シュトツフェラー・シュトラセ基礎学校に、FFにも指導・支援者として参加したSC シュバルツ・バイスのFユースコーチのシュミット (Schmidt, W.) を指導者とする課外サッカークラブが設立されたのである^{注36)}。この課外サッカークラブの活動は、毎週木曜日の16~17時までの1時間、基礎学校の体育館において8~11歳の生徒たち約40名を対象に実施された。その活動内容について、シュミットは筆者とのインタビューの中で、次のように述べている。「そこでのトレーニング内容は、サッカー指導に特化されることなく、子どもたちが運動を楽しく体験できるよう考慮した。トレーニングでは、特にサッカーの技術的・戦術的な指導などは行わず、子どもたちに自然に備わっている運動欲求を満たすことを目指した。トレーニングの最後の15分間はサッカーの試合を実施したが、それ以外の時間は多様なボールゲームを行うことにした。ただし、40名という参加者数の多さや、子どもたちの社会的態度の養成という意図から、特にチームスポーツとしてのボールゲームを主に実施した」。

また、彼は、この課外サッカークラブの活動での「素晴らしい成果」として、特に次の2点を挙げている。1つには、多くの女子生徒が参加したことであり、もう1つには、シュトツフェラー・シュトラセ基礎学校の女性教師たちが、生徒たちとともに活動したことである。フェラインでの活動が一般に男性を中心に実施されていることはしばしば指摘されている。たとえ少女たちがサッカーをプレーすることに関心を有していても、彼女たちを受け入れてくれるフェラインは決して多くない。この点を考慮するならば、シュミットも述べているように、女子生徒たちが運動やサッカーに関心を持って課外サッカークラブの活動に参加したという点、さらに別の見方をすれば、この

課外サッカークラブが、女性教師とともに、女子生徒たちを受け入れて活動を展開したという点は特筆されるべきであろう。また、スポーツ指導に関する専門知識の不備を指摘されることも多い基礎学校の（女性）教師たちが、課外サッカークラブでのフェライン指導者によるトレーニングに自発的に参加し、そこでのフェライン指導者との交流を通して新しい知識を獲得しようとしたことは、非常に重要な意味を持つだろう。なぜなら、課外サッカークラブにおける基礎学校とフェラインによるそうした協力関係が、正課スポーツ授業や課外スポーツ活動といった場面での教師の教授能力の向上を促し、学校スポーツの質を高めることにもつながるからである。

シュミットは、この課外サッカークラブでの活動を通して、SCシュバルツ・バイスの新たな青少年サッカープレーヤー、すなわち青少年会員を獲得することとともに、学校関係者にサッカーや運動の楽しさおよびその意義を理解してもらうことや、生徒たちの保護者にフェラインでのサッカーや運動を紹介することにも同様に努力している。彼のこうした努力によって、SCシュバルツ・バイスは、青少年会員の獲得という面で成果を収めたばかりでなく、シュトゥッフェラー・シュトラークセ基礎学校との協力関係を強固にすることができたという。

ここで取り上げた事例は、FF開催を契機にフェラインコーチを指導者とする課外サッカークラブを設立し、その基盤の上に学校とフェラインのパートナー的協力関係を構築しようとしている。本事例はまさに、FFに関するFVN学校委員会の基本的見解を体現するモデル的事例と捉えることができよう。

2.4 FFの特色

ここまでFFのプログラムの具体的内容、そしてFF開催後の学校とフェラインとの協力関係の構築事例を明らかにしてきた。以下では、そうした記述に基づいて、FFの特色を述べていきたい。

先ず第1の特色として、FFの対象が、前に言及したSHTと同様に、主に基礎学校年代の生徒であること、そしてそのプログラムの内容が、この年代に非常に適したものとなっていることが挙げられよう。プログラムは教室で実施される内容とグラウンドで実施される内容から構成されており、それぞれは生徒たちの関心を引くよう十分に工夫されている。例えば、「絵解きなぞなぞゲーム」や「ユニフォーム着替えリレー」などの教室内でのゲームは、サッカーを好きな生徒たちはもちろんのこと、それまでサッカーにあまり親しんでこなかったような生徒たちも楽しく参加できるし、サッカーに関する基本的な知識を得る機会も持てる。それらは、より多くの生徒たちにとってサッカーが身近に感じられるようなゲームであったといえるだろう。また、グラウンドでのプログラムに関しても、サッカー特有のスキルを子どもに適した形態で体験させることができるサッカー3種競技、キックの技術を用いて楽しく実施されるサッカーボーリングやさいころキックゲームなど、高いレベルのスキルや運動能力を有していなくても手軽にサッカーの面白さや素晴らしさを知ることができる内容となっており、全ての生徒がサッカーに親しめるように工夫されている。以上のことから、FFでは、教室およびグラウンドにおいて、基礎学校年代の子どもたちにサッカーの魅力を伝えるというその基本目標に適ったプログラムの内容が実践されていると評価できるだろう。

さらには、原則的に近隣に位置する単一の基礎学校と単一のフェラインが参加するというFFの開催形態も特筆されるべきだろう。こうした開催形態は、多数の基礎学校とフェラインが一堂に集うSHTのそれとは対照的であり、様々なプログラム内容の効率的な展開を可能とする。また、この1対1という関係が、SHTではやや不十分に見えた、学校とフェラインとの協力の促進に有効に機能していたように思われる。例えば、FFの開催に際し生徒の保護者に事前に配布されるプログラム日程表には、FFの開催趣旨とともに、参加フェラインにおける基礎学校年代に対応するユース段階、すなわちFユース（6～8歳：1994年当時）およびEユース（8～10歳：1994年当時）のトレーニング実施曜日・時間・場所、さらには連絡先が明記され、多くの生徒たちの試行的なトレーニング参加が呼びかけられているが、こうした方法での基礎学校とフェラインとの協力の促進は、単一の基礎学校と単一のフェラインの参加というFF特有の開催形態によって可能となっている。さらには、SHTと異なり、FFでは保護者、教師、フェライン関係者に、行事に参加する基礎学校やフェラインの存在が明確に意識される、そして何よりも生徒たちの関心や印象が特定のフェラインに集中されうるという利点は、このFF特有の1対1の関係を基に生み出されてくる。

また、そうした開催形態とも密接に関連して、FFでは、その下位目標に挙げられているように、行事開催後の参加基礎学校およびフェラインによる良好な協力関係の構築が非常に重要視されている点も見逃してはならない。ここで目指される協力関係とは、参加した基礎学校とフェラインが相互にパートナーとして認め合い、教師やフェライン関係者との交流や情報交換、施設や用具の共同利用、課外サッカークラブやフェライン未加入生徒のための試行トレーニンググループの設立など、様々な側面から長期的に支援し合うという関係である。そして実際に、FF開催後のそうした協力関係の構築事例が報告されている。

通常の授業とは異なる、課外の「フェスティバル」という開放的な雰囲気も、FFの特色といえるであろう。確かに、多数の基礎学校とフェラインが一堂に集うという前述したSHTの開催形態の方が、より「フェスティバル」的な雰囲気に包まれているとはいえるものの、単一の基礎学校とフェラインがそれぞれ参加するFFでも、教師、保護者、フェライン関係者は相互の存在をより意識した、活発な交流を展開し、生徒たちもそうした状況の中で非常に明るく、楽しそうな表情でボールを追いかけていた。特にFFのハイライトともいわれる、生徒チーム対教師・保護者・フェライン関係者合同チームのゲームでの、大人たちを負かそうとする子どもたちの生き生きした姿に、そうした「フェスティバル」としてのFFの特質が反映されていたように思われる。

以上のように、FFについては、基礎学校年代の子どもたちに適した多様なプログラムの内容、単一の基礎学校と単一のフェラインが参加する開催形態、開催後の長期的なパートナー的協力関係の構築の推進、「フェスティバル」としての開放的な雰囲気といった特色を指摘することができる。そして、そうした特色は、「サッカーの楽しさ、素晴らしさを子どもたちに伝える」というFFの基本目標や「学校とフェラインとの協力基盤を生み出す」などの下位目標の達成を目指したものであるだろう。

3. 「特別行事」の全体的特色

本項ではここまで、SHTとFFという2つのタイプの「特別行事」の内容および特色を分析してきた。以下に、その分析を通して明らかになった「特別行事」の全体的特色を指摘したい。

先ず第1の特色は、どちらのタイプの「特別行事」も基礎学校の生徒を対象としており、そのプログラムが、女子も含めた全ての生徒たちにサッカーの楽しさや素晴らしさを体験してもらえるような内容で構成されている点である。そこでの実施内容には、近年DFBが連邦規模のプロジェクトとして展開し始めたような「タレント発掘・育成」^{註37)}の側面は殆ど見られない。すなわち、「特別行事」は、ごく少数のタレントを見出す行事でなく、あらゆる技能レベルの生徒たちにサッカーの魅力を知ってもらうためのイベントと位置づけられている。

「特別行事」のこうした位置づけは、近年のドイツにおける青少年フェラインサッカーの危機的状況と、それに対するDFBおよびFVN、さらには両者の学校委員会の戦略展開とに大きく関係しているように思われる。現在青少年フェラインサッカーは、1970年代以降の出生率の低下に伴う青少年総数の激減、さらには青少年プレーヤーがフェラインから次々に退会していく「ドロップアウト現象」を背景として、「青少年フェラインプレーヤーの減少」という問題に直面している（藤井¹⁸⁾）。こうした状況の中、DFBをはじめとする各サッカー連盟は、個別のスポーツ種目の活動にまだ特化される前の基礎学校年代の子どもたちをいち早くサッカーに取り込み、衰弱しつつあるフェラインサッカーの基盤の再強化につなげようと様々な施策を展開している。「特別行事」もそうした施策の一環と捉えて良かろう。つまり、ここでは、基礎学校年代の子どもたちが「特別行事」によってサッカーの楽しさや素晴らしさを体験し、そしてサッカーボールで遊ぶことに夢中になり、やがてフェラインに加入してサッカーをプレーすることが期待されている。すなわち、「特別行事」の開催趣旨は、参加する基礎学校年代の子どもたち全てにサッカーの魅力を伝えるとともに、近い将来にその中から多くのフェラインプレーヤーを生み出そうというものである。

ただし、ここで重要なのは、FVN学校委員会が、確かに「特別行事」の開催に対して青少年プレーヤーの増加といったフェラインサッカーにとっての実利的な効果を期待しながらも、しかし一方では、それによる短期的な成果にはそれほど大きな意義を認めていないという点である。例えばこのことは、FF開催直後に基礎学校からフェラインへの加入者が大幅に増えたとしても、それ自体さほど重要な事柄ではないという趣旨のハインの言からも理解できる。ハインも強調するように、「特別行事」では、それをきっかけにして学校とフェラインとがパートナーとして認め合い、助け合っていくという長期的な観点に立った協力関係を確立していくことが先ず重要であり、そうした関係の中で、学校の生徒たちがフェラインへと継続的に加入していくことが望まれているといえよう。すなわち、「特別行事」は、子どもたちをサッカーへと誘うという役割と同時に、学校とフェラインによるパートナー的協力関係への契機としての役割が期待されているのである。この学校とフェラインとのパートナー的協力関係の構築という点に「特別行事」の第2の特色を見ることができよう。

ただし、この「特別行事」は、そうした協力関係を築ききっかけとして、学校とフェラインによ

るコンタクトの機会を提供するにとどまる。この点が第3の特色である。すなわち、FVN 学校委員会は、「特別行事」を開催はするが、その際に参加基礎学校およびフェラインに協力関係の構築を強制することはないし、後日そのための具体的な施策を新たに実施することもない。「特別行事」後の学校とフェラインの関係は、両者の意志に委ねられており、従ってそれは、先に示した事例のように継続的な協力関係へと発展する場合もあれば、「特別行事」での1回きりのコンタクトで終わる場合もある。このようなFVN 学校委員会の基本姿勢は、ハインも述べているように、「特別行事」後に目指されるパートナー的協力関係が、FVN 学校委員会という上位レベルの組織による指示ではなく、現場の学校およびフェライン自らによる具体的な行動を通してのみ構築されうるという認識から生じている。以上のことから、FVN 学校委員会は「特別行事」に協力関係へと至るきっかけ以上の意味を付与することはない。

もっとも、前述の内容分析からも理解できるように、「特別行事」が、そうしたきっかけとして適切な内容のプログラムを展開していることは明らかである。その最も大きな理由として、「特別行事」を開催するFVN 学校委員会という組織の存在、さらにはその組織内に、SHTの場合はエーレン、FFの場合はハインという事前の企画、運営、組織化、開催当日の指導・支援において中心的役割を果たす人物がいる点が挙げられよう。この「特別行事」の開催を支える中心的組織および人物の存在こそが、第4の特色である。DFBの下部組織サッカー連盟の1つであるFVNの学校委員会という社会的に認知される公的組織の存在は、基礎学校の「特別行事」への参加を促したり、「特別行事」に対する保護者の承認を得やすくしている側面があるだろう。また、エーレンは、SHTでは開催地域の基礎学校やフェラインの参加をとりまとめるとともに、プログラムの内容の作成、当日の準備、進行、支援等で極めて重要な役割を担っている。FFではハインに同様の役割が付与されている。すなわち、ハインは、基礎学校あるいはフェラインからの要請を受けて、FFに参加する学校およびフェラインを決定し、両者間の調整役を果たしながら、FFのプログラムの内容の作成、当日の準備や指導・支援などといった役割を負う。両方のタイプの「特別行事」も、エーレンやハインといった専門的知識・能力を有する人物の存在なくしては、その開催が不可能であったろう。

ここまで述べてきたことをまとめるならば、「特別行事」の全体的特色は、(田)その対象が基礎学校年代の子どもであり、そこで彼らがサッカーの楽しさや素晴らしさを体験できるような内容が実践されていること、また(用)「特別行事」が参加学校およびフェラインとのパートナー的協力関係の構築を極めて重要視していること、ただ実は(火)「特別行事」はそのような協力関係を築くための単なる契機として位置づけられているだけで、実際の協力関係の推進は、参加学校およびフェライン両者の意志と自発的で具体的な行動に委ねられていること、そして(水)「特別行事」の開催がFVN 学校委員会とそこでの中心的人物によって非常に上手く組織化され、運営されていること、の4点になるだろう。

(劣) 結語（まとめと今後の課題）

本論稿では、サッカー連盟、学校、フェラインの共同参加によって展開される「特別行事」の具体的内容を分析し、その特色を明らかにしてきた。それは以下のように要約できよう。

- 1) フェラインサッカーを統括する DFB は、学校委員会を設置し、ドイツにおける「学校サッカーの振興」および「学校サッカーとフェラインサッカーとの連携の推進」に努めている。ただし、この2つの課題は、ドイツ各州の文化高権の下では、実質的に DFB の下位組織である各州サッカー連盟の学校委員会に委ねられることになる。従って、「特別行事」の開催もまた、そうした各州サッカー連盟の学校委員会の活動領域の1つとみなされる。
- 2) NRW州の一地域を管轄する FVN の学校委員会も多くの「特別行事」を開催している。そして、その開催形態は、大きく2つのタイプに分類される。1つは、「SHT」に代表されるような、ある地域における多数の学校およびフェラインが一堂に集まる形態、もう1つは、「FF」に代表されるような、原則的に単一の学校と単一のフェラインが参加する形態である。
- 3) 両タイプの「特別行事」はともに、基礎学校年代の子どもたちを対象に開催される。従って、どちらの「特別行事」にも、基礎学校とフェラインが共同参加している。そして、そこでのプログラムは、タレント発掘・育成の側面を殆ど含んでおらず、全ての参加生徒たちがサッカーの楽しさや素晴らしさを体験できる、実施容易な内容から構成されている。
- 4) 「特別行事」では、参加基礎学校およびフェラインによる、その後のパートナー的協力関係の構築が極めて重要視されている。ただし、「特別行事」自体は、そうした関係を築ききっかけとしての機能を与えられているに過ぎず、その後の関係構築は両者に任せられている。従って、「特別行事」開催後に、FVN 学校委員会が、協力関係の構築のためにさらに特別な施策を展開することはない。それは、パートナー的協力関係が、学校委員会によって基礎学校とフェラインに強制されるべきものではなく、両者の自発的な意識と行動によってのみ築かれうると FVN 学校委員会も認識しているからである。

以上の「特別行事」の内容と特色に関するまとめを踏まえて、今後取り組むべき研究課題を示しておきたい。先ず第1の課題は、「特別行事」を「学校教師のためのサッカー講習会」「学校サッカーのための指導書の作成」などといった FVN 学校委員会の活動内容全体と関連させて捉えることである。本論稿で詳しく分析してきた「特別行事」は、前述したように FVN 学校委員会の多様な活動領域の1つであり、実際にはそれがその他の活動領域との有機的な関連の中で展開されている。従って、本論稿で進めてきたような「特別行事」の個別の分析にとどまらず、それが FVN 学校委員会の活動全体の中でどのような役割を果たしているのかを明らかにする必要がある。さらには、そうしたより大きな視点からの考察を通して、FVN 学校委員会が、「特別行事」をはじめとする様々な活動内容によって、具体的にどのような目標をどのようにして達成しようとしているのかを検討することもまた重要であろう。そして、第2の課題は、近年の「特別行事」の事例を新たに分析しつつ、「特別行事」がドイツの青少年サッカー活動全体の中でどのような成果を上げてきたのか

を検討することである。本論稿で分析した「特別行事」の事例は、1994年当時のものであり、2000年7月13日に筆者が実施したエーレンへのインタビュー調査によれば、当時の「特別行事」の基本的方向性が現在も維持されてはいるものの、やはり近年の「特別行事」の内容や特色をもう一度検討し、ここまで長く実施されてきた「特別行事」の成果を評価することが必要であるように思われる。そして、上記の諸課題と取り組みつつ、現在福岡大学で実施されている「キッズ・サッカークラブ」や「キッズ・サッカー教室」をより良いものに発展させていくための示唆を、この「特別行事」からできるだけ多く得ることが今後の重要な課題となろう。「キッズ・サッカークラブ」や「キッズ・サッカー教室」が、サッカーに関心を有する子どもたちによる自発的な参加に基づき展開されている一方で、「特別行事」は、参加基礎学校の生徒たちの全員参加を原則としており、そうしたそれぞれの参加者の特色を反映する形で、両者の内容にもやはり若干の相違が見られる。また、例えば「キッズ・サッカークラブ」はほぼ1ヶ月に1回の割合で活動されるが、「特別行事」はただ1回だけの開催にとどまっており、そうした違いも実施内容の相違に表れている。本論稿で分析してきた、「フェスティバル」的な要素を多く体现している「特別行事」の実施内容を、スキルの向上を目指す内容も多く含んでいる「キッズ・サッカークラブ」や「キッズ・サッカー教室」にどのように応用していくのかを検討することは重要であろう。

謝 辞

本論稿を完成させるにあたって、金沢大学の久保英哲教授ならびに福岡大学の大谷善博教授より適切な御指導をいただきました。お二人の先生に厚く御礼申し上げます。また、多くの煩雑な作業を快く手伝って下さった福岡大学の内田美津先生にも、記して感謝の意を表します。

注

注1) 本論中にも記したように、「キッズ・サッカークラブ」はほぼ1ヶ月に1回の割合で、平成15年度中に計13回開催される。福岡大学サッカーグラウンドにて、毎回のテーマに沿った形で、福岡大学サッカー部コーチングスタッフが小学校1年生から4年生を対象に各学年毎（各学年の参加者は約15名程度）に指導を行う。福岡大学スポーツ科学部で学ぶ2・3・4年生のサッカー部員は、大学教育内での(財)日本サッカー協会（以下JFAと略す）の準指導員ライセンス取得のためのカリキュラムの一環として、各学年担当のコーチングスタッフのアシスタントとしてこの講座に参加する。「キッズ・サッカー教室」は各期2回あるいは3回の集中方式で全3期開講される。その開講日時は「キッズ・サッカークラブ」と重なっており、参加対象が「キッズ・サッカークラブ」と同様に、小学校1～4年生であるため、彼らへの指導は、各学年毎に「キッズ・サッカークラブ」と合同で行われる。従って、「キッズ・サッカー教室」での各学年の指導内容は、「キッズ・サッカークラブ」と同一のものであるが、平成15年度中に指導を受ける回数は、当然「キッズ・サッカークラブ」の参加者の方が多くなる。なお、「キッズ・サッカークラブ」の受講者は、平成15年5月10日の第1

回目に54名、6月14日の第2回目以降68名となり（第3回目以降はエクステンションセンター規則により新たな受講登録ができない）、「キッズ・サッカー教室」の受講者は、8月1～3日の第(特)期に18名、12月26・27日の第(監)期に25名となっている。「キッズ・サッカー教室」の第(特)・(監)期は、「キッズ・サッカークラブ」と共同で実施されたため、特に12月26・27日は、「キッズ・サッカークラブ」と「キッズ・サッカー教室」の両方の受講者を合計すると93名に達している。

注2) 例えば、日本サッカーのより一層の環境充実と競技普及を目的に立案された、JFAが今後取り組むべき重点施策「キャプテンズ・ミッション」では、「幼児年代からの普及・育成体制の整備（JFAキッズプログラム）」が、第3番目の「ミッション」として掲げられており（JFA news²⁹⁾、多くの地域で活発な施策が展開されている。また、全日本大学サッカー連盟は、1999年に「大学サッカー活性化検討プロジェクト」を発足させ、2001年3月に出されたその第一次答申の中で「新大学サッカー構想（仮称）」を示しているが、そこでは、サッカーに関わる専門家の養成が、大学サッカーに課される重要な役割の1つに位置づけられている。そして、特に体育学部・教育学部系大学を中心とする指導者養成、すなわちJFA公認コーチライセンスおよびインストラクターライセンス取得を条件とした大学による少年・少女指導員および準指導員の養成（大学卒業時までには、準指導員ライセンスの取得を目指す）が、その目標と課題の1つとして挙げられている。

注3) ここで「特別行事（Sonderveranstaltung）」という用語について述べておきたい。この用語は本来、定期的に継続実施される施策とは異なる、ある特定日時に単発的に実施される行事的施策全てを含意するものである。しかしながら、本論稿では、サッカー連盟、学校、フェラインの共同参加による「特別行事」の殆どがこうしたフェスティバル形式のサッカーイベントであることから、「特別行事」をサッカー連盟、学校、フェラインによる共同のサッカーイベントと同義に用いている。

注4) ただし、この両者とともに、道路、空き地、公園などでの自由なサッカー遊び、すなわち「ストリートサッカー（Straßenfußball）」もまた、青少年にとって重要なサッカー活動の場であることを指摘しておく必要がある。特にストリートサッカーが盛んであった1950・60年代には、先ずそこでの創造的なサッカーボールとの触れ合いが、後のフェラインでのプレーの基盤になっていたとされる（Dietrich¹⁵⁾; Schmidt³⁷⁾。もっとも、この青少年たちのストリートサッカーの文化も、1980年代には既に衰退し始め、現在では消失しつつあるといわれる（Landau²⁹⁾; Schwier⁴⁰⁾。そうしたストリートサッカーの衰退傾向は、青少年プレーヤーの「技能レベルの低下」や「ドロップアウト現象」というフェラインサッカーをめぐる危機の顕在化とも大きく関連しているように思われる（藤井¹⁸⁾）。また、学校サッカーも、ストリートサッカーの衰退に伴う青少年たちの自己組織的なサッカー活動の展開能力低下への懸念から、技術・戦術的な「専門的プレー能力（Spezielle Spielfähigkeit）」の向上とともに、「全般的プレー能力（Allgemeine Spielfähigkeit）」あるいは「広義のプレー能力（Spielfähigkeit im

weiteren Sinne)」という概念の下で、自発的にサッカー遊びや試合を開始したり、障害を克服して継続させたり、状況に応じて創造的に変容させたりする能力の育成をその重要な教育目標に掲げている (Dietrich¹⁴⁾; König²⁵⁾)。このように見れば、ストリートサッカー、学校サッカー、フェラインサッカーの3者は相互に関連しながら展開されているといえる。しかしながら、本項では、課外サッカー活動である「特別行事」と特に関連の深い学校サッカーおよびフェラインサッカーをそれぞれ個別に概観するにとどめた。

注5) ドイツでは、1970年代初頭に「教科体育 (Leibeserziehung)」から「教科スポーツ (Sport)」へと教科名称が変更された。この名称変更は、現代社会の変化に呼応する形で、スポーツの「手段的価値」よりもむしろ「目的的価値」を重視するという教科理念の転換より生じた。そしてそれは、社会に受け入れられながら現在も継続して行われている (竹田ら⁴²⁾, pp. 31-34)。このスポーツを学ぶこと自体を主な目的とする教科スポーツの理念に基づいて学校教育の枠組みの中で実施されるスポーツ活動を、ドイツでは「学校スポーツ」という概念で捉えている。

注6) 文部大臣会議は、第2次世界大戦後、学校スポーツの展開に関わる連邦レベルでの基本的な政策枠組み合意として、「学校体育促進勧告」(1956年)「学校スポーツ行動計画」(1972年)「第2次学校スポーツ行動計画」(1985年)という3つの勧告・提案を行っている。第2次学校スポーツ行動計画以後、時代に合った行動計画の立案の必要性が指摘されてはいるものの、文部大臣会議から今までのところそうした新たな行動計画は公布されていない。従って、第2次学校スポーツ行動計画は、現在もおお学校スポーツの発展の方向性を示すドイツ全州に共通な指針としての役割を果たしている。そこでは、学校スポーツの主要な目標である「生涯にわたるスポーツ活動の実践」を促す鍵とされる、最低週3時間の正課スポーツ授業の実施や学校スポーツ担当教師の資質向上などといった、現在も継続的に取り組まれている諸問題に関わる具体的な提案が示されている (Haag et al.²¹⁾, pp. 262-276)。

注7) 第2次学校スポーツ行動計画は、「パートナーとしての学校とフェライン」という項を設けて、生徒たちに生涯スポーツへの動機づけを与えることが学校スポーツの当然の課題であり、従って学校スポーツと、学校以外での余暇のスポーツ活動の主要な担い手であるフェラインスポーツとが緊密に連携していく必要があると述べている (Haag et al.²¹⁾, pp. 275-276)。

注8) 我が国ではこれまで一般的に、ドイツには日本の学校運動部にあたる組織が存在しないとされてきたが、こうした指摘は必ずしも正しいとはいえない。確かにドイツの青少年のスポーツ活動の基盤は、周知の通りフェラインでのトレーニングおよび競技会活動ではあるが、しかし1960年代から既に、連邦学校競技会「青少年はオリンピックを目指してトレーニングする (Jugend trainiert für Olympia)」を頂点とする学校対抗競技会システムは存在してきたし、特に1980・90年代以降、各州の文部省とスポーツ連盟によって共同展開される学校スポーツとフェラインスポーツの連携推進のためのプログラム、すなわち州連携プログラムに基づく課外スポーツクラブでの継続的な活動がかなり一般的になってきている (Fessler¹⁶⁾)。また、

後述の「特別行事」後に設立された課外のサッカークラブのように、州連携プログラムといった制度に規定されることのない、個人のイニシアチブに基づき継続的に活動展開される課外スポーツクラブも多く見られる。このように考えれば、ドイツにも日本の運動部とやや類似した特色をもつ課外スポーツクラブがかなり存在するし、生徒たちは所属フェラインとは無関係の形で、学校チームの一員として学校対抗競技会に参加するといえる。なおここで、上述の連邦学校競技会「青少年はオリンピックを目指してトレーニングする」について述べておきたい。同競技会は、学校での適切なスポーツタレントの発掘・育成の展開、学校スポーツとフェラインスポーツの連携の推進などを目的に、1969年に旧西ドイツで開始された（Hartmann²²⁾, pp. 59-60）。伝統的に（旧西）ベルリン（Berlin）で開催されてきた同競技会では、サッカー、バスケットボール、器械体操、柔道など15種目（2003/2004年度現在）の各州予選を勝ち抜いた各学校単位のチームによって、それぞれのスポーツ種目における学校チームの連邦ナンバーワンの座が競われる。選手たちの多くは、日常フェラインに所属し、トレーニング・競技会活動を行っているが、この学校対抗競技会には、日頃通学する学校の代表選手として参加する。従って、学校チームは、多くの異なるフェラインに所属する選手によって構成されることになる。

注9) 第2次学校スポーツ行動計画では、こうした機能が「架け橋機能（Brückenfunktion）」（Haag et al.²¹⁾, p. 266）と表現されている。

注10) この1980年公布のNRW州学習指導要領（後に1989年に再版）は、その特性に応じて(田)必修領域、(用)選択必修スポーツ種目（ボールゲーム）、(火)補足的に選択可能なスポーツ種目およびスポーツ領域、の3つに分類された16スポーツ種目を、正課スポーツ授業で学習される学校スポーツ種目に定めている（Der Kultusminister des Landes Nordrhein-Westfalen⁴⁾, pp. 17-19）。そこでは、(1)陸上競技（補足的に選択されるオリエンテーリングを含む）、(2)器械体操（Turnen：学校スポーツでは、フェラインスポーツの場合と異なり、「トゥルネン」が器械体操と同義に使用されている）、(3)体操（Gymnastik）・ダンス、(4)水泳という4種目が必修スポーツ種目に、打ち返しゲームとしての(5)バドミントン、(6)テニス、(7)卓球、(8)バレーボール、投ゲームとしての(9)バスケットボール、(10)ハンドボール、シュートゲームとしての(11)サッカー、(12)ホッケーという8つのボールゲーム種目が選択必修スポーツ種目に、格闘スポーツとしての(13)フェンシング、(14)柔道、水上スポーツとしての(15)カヌー、(16)ボートという4種目が補助的選択スポーツ種目に分類されている。フェンシング、柔道、カヌー、ボートという補助的選択スポーツ種目は、施設や指導者の確保という点で必修領域および選択必修領域に組み込むことが「現在の枠組み条件の下では現実的でない」（Der Kultusminister des Landes Nordrhein-Westfalen⁴⁾, pp. 18-19）とされており、それらは、正課スポーツ授業では例外的に学習されているに過ぎないと推測される。なお、各スポーツ種目の学習内容は、学年に応じた単元から構成されており、各単元には学習目標が掲げられている。そうした単元の学習目標は、(田)習熟（Fertigkeiten）、(用)戦術（Taktik）、(火)コンディション（Kondition）、(水)組

織すること (Organisieren) という4つの構成要素と、それぞれの要素の中の知識 (Kenntnisse) の学習内容の習得によって達成されることになる。

注11) ここで、各学年における学習単元との関連において、ドイツの学校教育制度について述べておきたい。ドイツの学校教育制度は、前述の各州の文化高権に基づいて、州毎に各教育段階の就学期間や学校種などの点で相違が見られるものの、全州的に初等・中等（前期および後期）・高等教育という3つの教育段階に分けられる。6歳から開始される初等教育は、第1～4学年の「基礎学校 (Grundschule)」で実施される。これに続く中等教育段階は、第5～10学年の前期および第11～13学年の後期に分かれ、生徒たちは、「基幹学校 (Hauptschule: 通常5年制で、修了後に就職して職業訓練を受ける者が主に就学)」、「実科学校 (Realschule: 通常6年制で、修了後に上級専門学校など全日制の職業学校に進む者や中級の職に就く者が主に就学)」、「ギムナジウム (Gymnasium: 通常第5～13学年の9年制で、大学進学希望者が主として就学)」の3種を統合した「総合制学校 (Gesamtschule)」という複数の学校種のいずれかで学ぶことになる。特にギムナジウム生徒は、中等教育段階後期のギムナジウム上級段階での教育を受け、その修了試験である「アビトゥーア (Abitur) 試験」に合格すれば、高等教育機関である大学への入学資格が取得できる。一方、それ以外の多くの生徒は、中等教育段階前期を終えてから、企業における職業訓練と定時制の職業学校での教育を並行して受けることになる (天野ら¹⁾, pp. 29-36)。

注12) ただし、この学習指導要領には、例えば競技力の向上を目指すグループや学校対抗競技会参加チームの中でプレーする技能レベルの高い生徒たちが、正課スポーツ授業以外の場で学ぶべきとされる「補足単元」も記載されている。この補足単元を含めた全7つの単元をその目標や練習内容・方法に基づいて整理すると、単元(企)・協が「基礎段階」、単元(労)・ が「構築段階」、単元 ・ および補足単元が「達成段階」と区分されうる。そして、「基礎段階」では、技術・戦術に関する基本的能力を小集団での訓練によって身につけることや、そうした能力をコンビプレーの中で発揮できるようになることが、「構築段階」では、前段階で獲得された能力を精緻化すること、それをチーム戦術に応用し、11対11のゲームで使えるようになることが、「達成段階」では、特に11対11のゲームに関連した戦術能力を一層向上させることが、それぞれの主要な目標として指摘できる。なお、1980年公布のNRW州学習指導要領におけるサッカーの単元目標や練習内容・方法の詳細な分析は、大久保ら³⁵⁾を参照のこと。ただし、そこでは、「基礎段階」が「導入段階」、「構築段階」が「促進段階」、「達成段階」が「発展段階」と表現され、分析が進められている。

注13) 1980年公布のNRW州学習指導要領では、注10) で述べたように、教科内容の領域編成が16のスポーツ種目を単位としていたが、現行のNRW州学習指導要領は、下図に示される10のテーマを前面に掲げた編成方式をとっている (Ministerium für Schule, Jugend und Kinder des Landes Nordrhein-Westfalen³¹⁾, p. XXXIV)。そこには、身体領域が独立するなど、「脱近代スポーツ主義的な内容領域編成」(岡出³⁴⁾, p. 44) がはっきりと見て取れる。

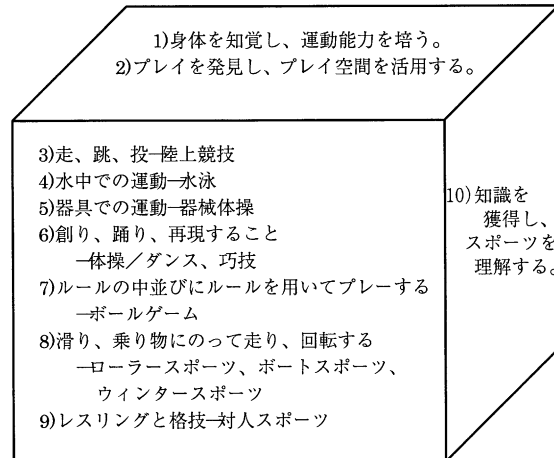


図4 現行 NRW 州学習指導要領で示された学校スポーツの内容領域
(岡出³⁴⁾、p.44を一部修正)

注14) ここでは、現行の NRW 州学習指導要領の中のサッカーに関する学習内容を詳しく記述することはしなかった。その理由は第1に、後述の「特別行事」の開催時に施行されていたのは、1980年公布の学習指導要領であって、現行の学習指導要領ではなかったという点にある。また、学校教育段階および学校種に基づいて全7巻から成る現行の学習指導要領は、本論中にも述べているように、各巻が1999年8月から順次施行され始め、2003年8月によりやく全巻の正式施行を見たという状況にあるため、現段階ではまだ学校という現場レベルで現行の学習指導要領の学習内容が十分に浸透していないと考えられる点に、その第2の理由がある。この現行の NRW 州学習指導要領のサッカーに関する学習内容の分析については、稿を改めて論じてみたい。なお、本論稿で特に NRW 州の学習指導要領を取り上げた理由についても触れておきたい。それは先ず第1に、後述の「特別行事」の分析が、NRW 州での事例を対象に進められているためである。この「特別行事」は、課外スポーツ活動の一環であり、同州の学習指導要領の枠組みの中で展開されることになる。第2の理由は、岡出³⁴⁾ (p.41) が述べているように、1980年に公布された NRW 州学習指導要領は、今日のドイツの学校スポーツを方向づける主導理念となった「スポーツの中の行為能力 (Handlungsfähigkeit im Sport)」論が初めて提示された学習指導要領であるとともに、全ての学校教育段階 (高等教育は含まない) および学校種を通して適用された初の学習指導要領であったことによる。つまり、NRW 州の学習指導要領は、各州で独自に施行されるドイツの学習指導要領の中でも最も代表的なもの1つであり、ドイツの学校スポーツの全体的特徴を捉えるのに好都合であったということである。また、その1980年公布の学習指導要領に一貫した継続的修正を加えて完成した現行の NRW 州学習指導要領も、そうしたドイツの全体像を表現する内容を備えているものと思われる。

- 注15) キュッパー (Küpper, D.) は、正課スポーツ授業と課外スポーツ活動とが相互に関連しているとし、その関係を特に(田)正課スポーツ授業の枠組み条件としての課外スポーツ活動、(月)診断と試験領域としての課外スポーツ活動、(火)授業提供の補足としての課外スポーツ活動、(水)正課スポーツ授業の意図に関して目標指向的に継続される課外スポーツ活動、(木)正課スポーツ授業のオルタナティブとしての課外スポーツ活動、という5つの視点から述べている (Küpper²⁷⁾, p. 7)。そうしたキュッパーの見解は、ここでの正課サッカー授業と課外サッカー活動との関係にも該当しよう。
- 注16) 1985年、NRW州の文部省とスポーツ連盟は共同で、州連携プログラム「学校とフェライン／連盟の連携におけるタレント発掘および育成」を開始し、現在もそれは基本路線を維持しながら展開されている。このプログラムの柱は、特に基礎学校を中心とする学校の課外スポーツクラブとフェラインとの緊密な連携に基づく、長期的展望に立ったタレント発掘・育成プロジェクトの展開である。具体的には、タレント発掘グループとタレント育成グループに大別される、基礎学校の課外スポーツクラブ、すなわち自由参加生徒スポーツクラブ (Freiwillige Schülersportgemeinschaft) と競技力の高いフェラインとの連携によって、様々なスポーツ種目のタレントが発掘・育成される。1999年には、NRW州における1,763のタレント発掘グループと973のタレント育成グループが、プログラムに登録されているが (Landessportbund Nordrhein-Westfalen et al.³⁰⁾, p.12)、それらの多くはフェラインと連携した活動を行っているものと思われる。なお、このNRW州のタレント発掘・育成プログラムの詳細な内容およびサッカーを事例としたその具体的展開に関しては、藤井¹⁹⁾を参照のこと。
- 注17) ヴェーバー (Weber, W.) らによれば、約70%の住民が実際に何らかのスポーツ活動を行っており、そうしたスポーツ実施者の63.6%が自己組織的に活動している。また、スポーツ実施者の18.4%がフェラインで定期的にスポーツをしており、この数値は、自己組織的に活動する者の割合の次に高い (Weber et al.⁴³⁾, pp.67-74)。
- 注18) 例えば、クルツ (Kurz, D.) らの1995年の調査によれば、NRW州の青少年男子の55%および女子の41%がフェラインに所属しており、その殆どの者 (男子53%および女子40%) はそこで定期的にスポーツ活動を行っている (Kurz et al.²⁸⁾, pp.395-397)。もっとも、このクルツらの調査からも読みとれるように、こうしたフェライン加入率は、例えば年齢層や地域によって異なってくるし、学校種、性別、社会的出自による明らかな格差も見られることから (Kurz et al.²⁸⁾, pp.401-405)、より相対的に評価される必要はある。
- 注19) 例えば、ブレットシュナイダー (Brettschneider, W.-D.) らが1989年にNRW州で実施した大規模な青少年スポーツ調査によれば、フェラインでのスポーツ活動は、青少年が余暇活動において最も頻繁に行う活動の第3番目に、さらには青少年にとって最も重要な余暇活動の、これも第3番目にランクされている。両者とも上位2つは、音楽鑑賞と友人との集いであった (Brettschneider et al.³⁾, pp.41-43)。
- 注20) ディールケス (Dierkes, E.) によれば、ドイツスポーツ連盟の青少年連盟組織であるドイ

ツシュポルトユエグント (Deutsche Sportjugend) が推進するような、広範な教育学的目標設定に基づくスポーツ青少年活動は、フェラインにおいて十分に実践されていないのが現状であり、そこでは主に、指導者の個人的経験や意識によって規定された、特定スポーツ種目の競技力向上を目指した活動が展開されている (Dierkes¹³⁾, pp.63-68)。なお、スポーツに関連する様々な青少年連盟およびフェラインでのスポーツ青少年活動の内容と特色については藤井¹⁴⁾を参照のこと。

注21) DFBの「規約および諸規則 (Satzung und Ordnungen)」の中の「青少年規則 (Jugendordnung)」によれば、各ユース段階の年齢区分は、Aユース19・18歳以下、Bユース17・16歳以下、Cユース15・14歳以下、Dユース13・12歳以下、Eユース11・10歳以下、Fユース9・8歳以下、Gユース7歳以下となっている。なお、G～Cユースまでは、男女混合チームでの活動が可能である。そして、特にG～Dの各ユース段階でのチームプレーヤー数、ルール、試合コート大きさ、用具などは、その発達段階に適するように異なって規定されている。なお、上記の記述は、DFBのホームページ (<http://www.dfb.de/>) に掲載されている、2003年12月11日より有効のDFBの「規約および諸規則」の内容に基づいている。従って、文献の参考・引用の場合とは異なり、出典および記載ページを明記することができない。以下、本論中にも見られるDFBの「規約および諸規則」の内容に基づく記述も同様である。

注22) 後述するように、DFBは、地域サッカー連盟 (Regionalverband)、州サッカー連盟 (Landesverband)、広域サッカー連盟 (Bezirksverband)、郡サッカー連盟 (Kreisverband)、そしてそこに登録されるフェラインとフェラインプレーヤーを統括する組織である。各サッカー連盟は、年齢や性別に基づく、それぞれ競技力が異なる「リーグ」を運営しており (DFBが運営するプロフェッショナルリーグである「ブンデスリーガ (Bundesliga)」の1部および2部を除き、地域サッカー連盟のリーグが最も競技レベルが高い)、フェラインは競技力に応じたリーグでシーズンを通じて戦うことになる。成績に従って上位のリーグへの昇格や下位のリーグへの降格もありうる。また、ユース年代によって最上位リーグの設置上限があり、例えばAユースおよびBユースでは、地域サッカー連盟のリーグまで存在する (ただし、2003/2004年シーズンからは、これまで存在しなかった青少年ブンデスリーガが、Aユースを対象に立ち上げられた。DFBが、ドイツ全土を3つの地域に分けてそのリーグ運営を行う。各リーグには、各地域のブンデスリーガフェラインのAユースチームを中心に14チームが参加しており、最終的には各リーグの1位チームを中心とする決勝ラウンドによってドイツチャンピオンを決定する) が、FユースやGユースは、郡サッカー連盟レベルで少数のチームによる親善試合という意味合いでのリーグ戦しか実施せず、従ってリーグ間の昇格や降格もない。

注23) こうしたドイツの競技大会の運営理念は、日本のそれとは極めて対照的であるように見える。周知の通り、これまで我が国の競技大会運営はトーナメント戦が中心であり、早期ラウンドで敗退を強いられるチームの公式試合がかなり少ない点や、1校から1チームのみに大会参加が限られているために非レギュラー選手の公式試合での実戦経験が非常に乏しい点などが

その問題点として挙げられてきた。もっとも、近年では、各地域単位での第2種年代（18歳未満）の公式リーグ戦「JFA プリンスリーグU-18」や、東京都文京区および豊島区の学校運動部とクラブユースが参加する「DUO（デュオ）リーグ」（中塚²²⁾）の立ち上げなどの動きに見て取れるように、我が国でもリーグ戦形式による競技大会へとその運営方法を変えていこうとする試みが活発化してきている。

注24) ハイネマン（Heinemann, K.）らによる「シュポルトフェライン財政・構造分析」の調査結果（Heinemann et al.²³⁾）は、ドイツのフェラインがそれぞれ、会員総数、会員構成、活動内容、協力者、財政、施設などの点で、非常に大きな相違を有していることを示している。単一スポーツ種目しか実施しない、会員総数の少ないフェラインのかかなりの割合が、サッカーを唯一の活動スポーツ種目としているともいわれており、そのようなフェラインでは、人的・物的・財政的資源が小規模である場合が見られる。

注25) 筆者は、1996年11月30日、DFB 学校委員会の活動に関して同委員会委員長であるバスマント（Wassmund, W.）にインタビュー調査を実施した。その際に入手したDFB 学校委員会の関係資料には、青少年サッカー専門委員会や青少年部局の関係者だけでなく、当時のDFB 会長ブラウン（Braun, E.）やドイツサッカーナショナルチーム監督フォクツ（Vogts, B.）へも向けた、「学校サッカーの振興」や「フェラインサッカーと学校サッカーとの連携の推進」などに関わる文書も多く含まれていた。

注26) 連邦学校競技会「青少年はオリンピックを目指してトレーニングする」のサッカー競技には、男女ともに2つの年齢段階、すなわち11～13歳の競技段階(Ⅱ)、13～15歳の競技段階(Ⅲ)それぞれにおいて、各州代表全16の学校チームが参加している（2003/2004年度現在）。この競技会が学校スポーツの管轄下にあるため、DFB やその学校委員会は、直接的にサッカー競技の運営を行うことはないものの、審判の派遣、用具の提供、その他の物的支援などを通して、競技運営の円滑化に協力している。

注27) 実は、ドイツ各州の文化高権の下での、こうしたDFB 学校委員会の活動や機能の実状については、DFB の「規約および諸規則」あるいは文献等にも記されていない。ここでの記述は、DFB 学校委員会委員長であるバスマントをはじめとする関係者へのインタビュー調査、さらには私信という形での諸学校委員会の組織構造や活動に関する問い合わせによる実態把握に基づいている。

注28) 例えば、州サッカー連盟の1つであり、NRW州の一部を管轄するミッテルラインサッカー連盟（Fußballverband Mittelrhein）の学校委員会は、その委員長であるシェントゲラート（Söntgerath, P.）も認めているように（筆者は1996年10月21日、シェントゲラートにミッテルラインサッカー連盟学校委員会の活動についてインタビュー調査を実施した）、それほど活発な活動を展開しているわけではない。しかしながら、シェントゲラートは、同じNRW州を管轄する後述のニーダーラインサッカー連盟学校委員会をモデルとして、ミッテルラインサッカー連盟学校委員会もまたその活動を活性化していく必要があることを認識し

ている。そして実際に、シェントゲラートの発案によって、ニーダーラインサッカー連盟学校委員会の活動事例にならない、本論稿のテーマである「特別行事」や学校教師のためのサッカー講習会を開催している。一般的には、このニーダーラインサッカー連盟学校委員会とともに、ニーダーザクセンサッカー連盟 (Niedersächsischer Fußball-Verband) そしてヴェルテンベルクサッカー連盟 (Württembergischer Fußball-Verband) という2つの州サッカー連盟の学校委員会が、その他の州サッカー連盟の学校委員会にとってのモデル的な位置づけにあるといわれる。

注29) 州サッカー連盟の1つである FVN は、ヴェストファーレンサッカー連盟 (Fußball-Verband Westfalen) と前述のミッテルラインサッカー連盟とともに、NRW州を管轄する西部地域サッカー連盟 (Westdeutscher Fußballverband) に加盟している。これら3つの州サッカー連盟は、NRW州を3地域に分割して管轄し、それぞれの地域の特色に応じた活動を展開している。FVNの管轄地域は、州都デュッセルドルフ (Düsseldorf) やデュイスブルク (Duisburg) といった都市を含む NRW州北西部地域となっている。FVNの本部は、西部地域サッカー連盟本部とその拠点スポーツ施設であるヴェダオシュポルトシューレ (Sportschule Wedau) に隣接した形で、デュイスブルクに置かれている。

注30) こうした FVN 学校委員会の組織構造に関わる具体的記述は特に、1993年10月から1994年9月にかけて FVN 本部やヴェダオシュポルトシューレで数回にわたり実施した、リューペルツ、エーレン、ハインへのインタビューの内容に基づいている。また、その際に入手した、リューペルツによって作成された FVN 学校委員会の活動報告書 (Fußballverband Niederrhein²⁰, pp. 22-30) も活用した。なお、ここでは、それら以外にも、後述の「特別行事」や「学校教師のためのサッカー講習会」の現場などでの関係者との対話によって得られた様々な情報も参考にしている。

注31) 以下は、特にリューペルツおよびエーレンへのインタビュー調査の内容と、その際に入手した資料を総合的に考察し、記述している。

注32) バオマン (Baumann, N.) によれば、基礎学校における正課スポーツ授業の60%が、大学でスポーツの専門教育を受けてこなかった教師によって担当されている。一方、ギムナジウムでは、そうした授業の割合が10%以下であるという (Baumann²¹, p. 5)。

注33) 1994年9月19～21日の3日間、デュイスブルクのヴェダオシュポルトシューレで中等教育段階前期の教師を対象とするサッカー講習会が開催された。参加者は女性6名を含む全22名であり、その殆どが、大学での教員養成専門教育でスポーツを専攻した学校スポーツ教師であった。講師は主にハインが務めた。筆者は、主催者である学校委員会の側に加わって、この講習会の内容を観察調査した。

注34) この FF に関する以下の記述は、1993年9月16日付の地方新聞「WAZ」の記事内容に基づいている。

注35) この FF に関する記述は、後述の SC シュバルツ・バイスの指導者へのインタビュー調査と

- ともに、1993年12月14日付の地方新聞「Düsseldorfer Stadtpost」の記事内容に基づいている。
- 注36) 筆者は、1994年9月21日、このFFとその後の基礎学校とフェラインとの協力関係の具体的な展開についてシュミットにインタビュー調査を実施した。
- 注37) 1999年にDFBは、ブンデスリーガフェラインおよび州サッカー連盟との緊密な連携の下で、大規模なタレント育成プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトの大きな柱は、連邦全土に設置された121の「拠点 (Stützpunkt)」におけるトレーニング、すなわち「拠点トレーニング」での優れたタレントの発掘と育成である。このプロジェクトの概要については藤井¹⁸⁾を参照のこと。

文献

- 1) 天野正治・結城忠・別府昭郎編著 (1998) ドイツの教育. 東信堂: 東京.
- 2) Baumann, N. (1993) Nicht kürzen, sondern ausbauen! – Aber zeitgemäß!: Sportpädagogisch Denken bei der Flexibilisierung der Stundentafeln. Sportpädagogik 17(1): 5-7.
- 3) Brettschneider, W.-D./Bräutigam, M. (1990) Sport in der Alltagswelt von Jugendlichen: Forschungsbericht. Verlagsgesellschaft Ritterbach mbH: Frechen.
- 4) Der Kultusminister des Landes Nordrhein-Westfalen (1989) Richtlinien und Lehrpläne für den Sport in den Schulen im Lande Nordrhein-Westfalen: Band I. Allgemeiner Teil. Verlagsgesellschaft Ritterbach mbH: Frechen.
- 5) Der Kultusminister des Landes Nordrhein-Westfalen (1989) Richtlinien und Lehrpläne für den Sport in den Schulen im Lande Nordrhein-Westfalen: Band (企). Alternativ Verbindliche Sportarten. Greven Verlag: Köln.
- 6) Deutscher Fußball-Bund (Hrsg.) (1993) Deutscher Fußball-Bund. Frankfurt am Main.
- 7) Deutscher Fußball-Bund (Hrsg.) (1993) Handbuch für Vereins- und Verbandsmitarbeiter. Frankfurt am Main.
- 8) Deutscher Sportbund (Hrsg.) (1990) Sport in der Bundesrepublik Deutschland. (16. Auflage): Frankfurt am Main.
- 9) Deutscher Sportbund (2001) Jahrbuch des Sports 2001 2002. Schors-Verlag: Niedernhausen/Ts
- 10) DFB-Schulfußballausschuß (1966) Unterrichtsbilder für den Schulfußball. (2. Auflage): Frankfurt am Main.
- 11) DFB-Schulfußballausschuß (1983) Mit kleinen Spielen zum großen Spiel. (4. Auflage): Frankfurt am Main.
- 12) DFB-Schulfußballausschuß (1990) Der Fußball-Knirps. (5. Auflage): Frankfurt am Main.
- 13) Dierkes, E. (1985) Jugendverbandsarbeit im Sport. Hofmann: Schorndorf.
- 14) Dietrich, K. (1984) Vermitteln Spielreihen Spielfähigkeit? Sportpädagogik 8(1): 19-21.
- 15) Dietrich, K. (1989) Kinder- und Jugendfußball im Verein. Fußballtraining 7(10): 3-8.

- 16) Fessler, N. (1997) Kooperationsstrukturen. In: Fessler, N./Rieder, H. (Hrsg.) Kooperation von Schule und Sportverein in Deutschland. Hofmann: Schorndorf. pp. 21-99.
- 17) 藤井雅人 (1998) ドイツにおける地域教育とスポーツー連盟青少年活動としてのフェラインスポーツー, 北陸体育学会紀要34: 15-22.
- 18) 藤井雅人 (2001) ドイツの青少年サッカーー危機とその背景ー, 日本スポーツ教育学会第20回記念国際大会論集: pp. 225-260.
- 19) 藤井雅人 (2003) ドイツにおける学校とシュポルトフェラインの連携ーNordrhein-Westfalen州におけるタレント発掘およびタレント育成のための州連携プログラムの展開ー, スポーツ教育学研究23(1): 17-40.
- 20) Fußballverband Niederrhein (1992) Bericht zum Jugendtag des Fußballverbandes Niederrhein im Mai 1992. (unveröffentl. Manuskript) Duisburg.
- 21) Haag, H. / Kirsch, A. / Kindermann, W. (Hrsg.) (1991) Dokumente zu Sport, Sporterziehung und Sportwissenschaft. Hofmann: Schorndorf.
- 22) Hartmann, H. (1991) Kooperationsmodelle zwischen Schule und Verein und ihre Anwendungsmöglichkeiten auf den Sport in der Darmstädter Region. (Einführung in die Podiumsdiskussion) In: Hartmann, H. (Hrsg.) Modernes Training im Sport (監). Darmstadt. pp. 59-63.
- 23) Heinemann, K. / Schubert, M. (1994) Der Sportverein: Ergebnisse einer repräsentativen Untersuchung. Hofmann: Schorndorf.
- 24) JFA news (2003) キャプテン・ヘッドクォーターズより. No. 227. 57.
- 25) König, S. (1997) Zur Vermittlung von Spielfähigkeit in der Schule: Überlegungen zu einem lehrplanorientierten und pragmatischen Vermittlungskonzept. Sportunterricht 46 (11): 476-486.
- 26) 高津勝 (1996) 現代ドイツスポーツ史序説. 創文企画: 東京.
- 27) Küpper, D. (1987) Außerunterrichtliche Angebote des Schulsports: Zur Beschreibung, Begründung und Realisierung von Sport, der in der Schule zwar stattfinden, nicht aber als Unterricht veranstaltet werden soll. Sportunterricht 36(1): 5-9.
- 28) Kurz, D. / Tietjens, M. (2000) Das Sport- und Vereinsengagement der Jugendlichen: Ergebnisse einer repräsentativen Studie in Brandenburg und Nordrhein-Westfalen. Sportwissenschaft 30(4): 384-407.
- 29) Landau, G. (1992) Frei inszeniertes Fußballspiel Schulfußball. In: Hamsen, G. (Red.) Juniorenfußball im Brennpunkt. Clausthal-Zellerfeld. pp. 149-152.
- 30) Landessportbund Nordrhein-Westfalen / Ministerium für Arbeit, Soziales und Stadtentwicklung, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen (Hrsg.) (1999) Landesprogramm „Talentsuche und Talentförderung in Zusammenarbeit von Schule und Verein/Verband“: Ziele, Entwicklungen und Ergebnisse 2000. Druckerei und Verlag Peter Pomp GmbH: Bottrop.
- 31) Ministerium für Schule, Jugend und Kinder des Landes Nordrhein-Westfalen (1999) Richtlinien und Lehrpläne für die Grundschule in Nordrhein-Westfalen: Sport. (veränderter Nachdruck 2003) Ritterbach

Verlag GmbH. Frechen.

- 32) 中塚義美 (2002) 補欠ゼロ・引退なしのサッカー部—DUO リーグの実践から—, 体育科教育 50(4): 52—56.
- 33) 岡出美則 (2000) ドイツを例にした学校5日制に向けての教科体育カリキュラム研究 (平成10年度～平成11年度文部省科学研究費補助金 (基盤研究C (2)) 研究成果報告書).
- 34) 岡出美則 (2002) ドイツにみる学校体育カリキュラム改革の動向, スポーツ教育学研究22(1): 39—48.
- 35) 大久保英哲・藤井雅人 (1992) Nordrhein-Westfalen 州学習指導要領 (1980) におけるサッカー指導の特色について, 金沢大学教育学部教科教育研究28: 107—121.
- 36) Röthig, P./Becker, H./Carl, K./Kayser, D./Prohl, R. (Hrsg.) (1992) Sportwissenschaftliches Lexikon. (6., völlig neu bearbeitete Auflage) Hofmann: Schorndorf.
- 37) Schmidt, W. (1993) Kindheit und Sportspielzugang im Wandel. In: Schmidt, W. (Hrsg.) Vermittlungs- und Trainingskonzepte im Wandel. Academia Verlag: Sankt Augustin. pp. 7-35.
- 38) Schulfußball-Ausschuß des FVN (1992) Kinderfußball in der Schule: Arbeitshilfe für Lehrerinnen und Lehrer in den Jahrgangsstufen 1 bis 6. Duisburg.
- 39) Schulfußball-Ausschuß des FVN (1992) „Faszination Fußball“-Projekttag(e) an der Schule: Arbeitshilfe für Lehrer/innen und Vereinsmitarbeiter/innen. Duisburg.
- 40) Schwier, J. (1993) Kinderfußball in der Diskussion: Diagnosen und Perspektiven. In: Schmidt, W. (Hrsg.) Vermittlungs- und Trainingskonzepte im Wandel. Academia Verlag: Sankt Augustin. pp. 36-40.
- 41) Statistisches Bundesamt (Hrsg.) (2003) Statistisches Jahrbuch 2003. Wiesbaden.
- 42) 竹田清彦・高橋健夫・岡出美則編著 (1997) 体育科教育学の探求. 大修館書店: 東京.
- 43) Weber, W./Schneider, C./Kortlüke, N./Horak, B. (1995) Die wirtschaftliche Bedeutung des Sports. Hofmann: Schorndorf.